
魔法少女まどか マギカ| ← Intruder Alarm

Einsel

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女まどか マギカ ↑ Intruder Alarm

【Nコード】

N9796S

【作者名】

Einsel

【あらすじ】

魔法少女達の知らない場所で、もうひとつの物語が動きだす。

——交わした約束を守るため。

プロローグ（前書き）

魔法少女まどか マギカの二次創作になります。本家様とは関係無いのでご注意を。

この二次小説には

《オリジナル》

《本家とまるで違う》

《稚拙で駄文》

《霧》

《ご都合主義》

《超技術》

《オマージュという皮を被ったパクリ疑惑》

《創作言葉》

《厨二病》

などなど人様の精神を逆なでするような内容がふんだんに含まれております。

それでも何も怖くなくてMOGUMOGU出来る方は汚物でも見て蔑む綺麗な瞳で御覧になってください…。

プロローグ

世の中には科学なんかでは解決出来ない、知る事も出来ない事が山ほどある。

この物語もその一部であるように

【魔法】が存在する。

魔法なんて今時の子供だって信じる訳が無い。そう思えるだろう？でも實在、実例が有るんだから仕方が無い。世間様の“常識”に隠れて

【魔法少女】と呼ばれる子達が

【魔女】を相手に日夜人知れず生死の境を行き来している。

誰にも話せず

誰にも感謝されず

孤独に死ぬ。

魔法少女なんてなあ名前だけのブラック企業みたいなもんさ。

兎角言う俺も、彼女達が死ぬ瞬間を何度も見てきた。その事に対しての世の中の動きも……。

「…む、魔女の匂いが強くなってきたぞ」

「そうか。近いか？」

「あの店を左に曲がれ」

「了解と……！」

スピードを殺さず爪先だけで方向修正。直角に曲がる。

端から見たら、つむじ風でも通ったのかという程の速度。普通の奴だったらまずそこいらのモノと感動の抱擁だ。

でもその点俺は大丈夫だ。

「あれだ」

「確認した。結界が出来上がる前に見付けられてよかった」

コンクリートの地面をもともせず突き刺さり妖しげな光を放つ物体、グリフシード。

この世ならざる存在、魔女、そして魔法少女と関わりの深い“異物”見た目金細工の黒い調度品と見間違えそうになる。実際、俺も昔間違えた。まあそれはさておき、コイツはある一定時間を過ぎると“孵化”を始め、魔女の住家となる結界が発生する。

そこに飲み込まれたら最後、普通の人間なら魔女の食い物になってしまう。勿論死体なんて残らない。

「今にも孵化しそうだの。さて、今回は如何なる奴か愉しみじゃ」

「悪趣味だなあ。……ん？」

うちの“相棒”がまだかまだかとソワソワしていると、俺の視界に何かが入り込んできた。

「む？ ……………人間か」

相棒も気配を察知し、来訪者の方へ向「おい身体をあっちへ向けろ。

見えんではないか」……自分で移動すりゃいいでしょうに……。ふらふらと覚束ない足取りでこちらに近寄ってくる。

「ふむ、女子おなこか。しかもかなり若い」

「言い回しが古い……。しかし良く見えるな」

「夜は僕の最も得意とする時間じゃぞ。舐めるな」

現在夜中の零時を半分回ったところだ。大半の店は閉まっっていて人の気配が無い。ゴーストタウンかと思えるくらいに人の気配が無い。そんな中に女の子がふらふら出回ってれば疑いたくもなる。

「一応“忌避の印”を廻らせておいたんだが…、成程。“ミツキ”、あの女子おなこが魔女の標的じゃ」

標的…。不気味に明滅を繰り返す街頭に照らされ顔が見えてきた。
「……………」

見た目十代前半程度の子供、いやまあ俺も子供だけどさ。その目は虚ろで、何処を見ているのか分からない。……何かぼそぼそと譫言を言っているようだ。

「首筋に証が付いておる。間違いないな」

証つてのは“魔女の口づけ”と呼ばれる呪いの一瞬。あれが付くと…色々危ない状態になってしまう。

「なら……。おい、そこのお前」
「……………」

反応無し。段々こちらに近付いてくる。このままじゃ結界に飲まれ

るか…。

「おい止まれ。聞こえないのか」

「呼ぶだけ無駄だ。この女子を餌にしておびき出すのが良策だろう」

一般人を餌にするのが良策とは到底思えないが、今までも同じような事を何度かやってきた。今更…、だろうさ。

「……来たぞ」

―瞬間、周囲が極彩色の空間に包まれる。

…魔女だ。辺り一面が結界に塗り潰され、幻想と狂気を目茶苦茶に混ぜ合わせた世界が広がる。

「…あの子は？」

…近くにいたハズだが、どうやら飛ばされたらしい。

基本魔女の結界内は迷路のようになっていて、迷えば二度と出る事は出来ない。

「急ぐぞ」

「使い魔の餌にしないのか？」

「する訳無いだろ。魔女自体がいるんだ、使い魔の餌にさせたら無駄死になる」

相棒はどちらかと言えば利己主義な所がある。まあ…、魔女がグリフシードを落とす確率を考えたら、魔女の数が多い事に越したことはない。

「…まだ手遅れじゃねえんだ。なら助ける」見捨てて魔女の数を増やし、グリフシードの数を増やし、利益を高める……。

「非効率だな」

「前にも言っただけどさ——」

懷から“黒いループビックキューブ状”の物を取り出す。中心が淡く光っているのがポイント

一見玩具にしか見えないかもしれないが、俺の大切な商売道具だ。

「……」

そのキューブに魔力を流す。

すると微かに振動しだし、瞬く間に巨大な剣へと形が変わる。

「さて、行くか。」

「へマするなよ？」

相棒の姿が“猫っぽい”ような姿が光りだし、光る球体に姿を変え、俺の体に吸い込まれた。

一瞬で服がファンタジックな服へと変わる。

『よし、行け』

「あいよ」

得物を肩に担ぎ、魔女の元目指して走りだす。

忘れるな、覚えておけ（前書き）

実は作者の愚行により改めての投稿となります…。
申し訳ありません…。

忘れるな、覚えておけ

<昨夜未明

<都内。〇。県在住の

<少女が行方不明に。

<警察によれば

<昨夜にそれらしき姿が

<目撃されたが

<依然消息は掴めない

いんたあねつとは各も便利よな。昨夜の事がもう世に出回っておる。

「…ふむ。 ” ミツキ ” の事は言われておらんようだの」

魔女狩りをするに当たり気にするのは、ミツキの姿を見られている
かないか。

こんな世の中じゃ。誰ぞに見られてもおかしくは無い。毎度毎度の
確認作業も十年近く続けておれば小慣れたもんよ。

「…さて、妹殿が起こしにくる時間か」

ぱそこん内の時計を見遣れば、朝の七時半になる前。普通の学徒な
らば、既に起床しているであろう時間帯にこやつはまだ眠りこけち
よる…。

まあ、昨夜の事でやや凹んでいるとは言え…、寝坊助なのは直らん
のお。

「こら寝坊助」

「……………」

「……ふう。まったく、うちの相棒の寝起きの悪さはどうにかならんもんかのう、ナンスイイ殿」

と言って目の前のはそこを優しく撫でる。決して爪を立ててはならぬ。ナンスイイ殿の柔肌に傷が付いてしまう。

「……………いい加減人のPCに変な名前付けるなというところに……」

「む？ おお、起きたか。ナンスイイ殿、そちの主の起床じゃぞ」

「だからナンスイイってなんだよ……」

ふふふ、儂の素晴らしき匠の命名に付いて来れないのは相変わらずよの。

「初代PCはベックウイイ、二代目はジェッスイイ、んで最新はナンスイイか。なんだお前はなんだ未来に生きとるんか」

「儂の道楽は二歩三歩先をゆく。早う大人になれりや。そうすれば理解出来よう」

そんな大人にやなりとうない、と言ってまた布団に潜り込みはじめた。だから起きるとゆうに。

……まあ、昨夜の事で少々落ち込むのは解るが、毎回そんなでは困ると何度も言っておるうに。

すると、部屋の外からパタパタとこちらに近づく足音。早速お出ましか。名残惜しいが、ナンスイイ殿と別れ（ただのシャットダウン

ン)、そそくさ定位置に陣取るとしよう。

…定位置とは言うが、詰まりミツキの布団中じゃ。取り敢えず、家の中で儂は“猫っぱい何か”という位置にある。

「お兄ちゃん、あゝさですゝよ」

早速部屋に入ってきた妹殿。こつも毎朝毎朝甲斐甲斐しく起こしに来る妹も中々おるまいて。

「あと三十分…」

「それじゃ遅刻だよ」

「んにああ」

「あ、“すっぴー”もおはよう」

すっぴーではないと言っておるうちに…！ 全く変なあだ名を付けおつて。

儂の名は“スピネル”だ！

「おはようすっぴー」

「ミツキ…、お前改めると妹殿に言わんかったんか!？」

「言っただけ改める気は無いとさ。因みに、母さんに言っても無駄」

おのれ……、恐るべし“三峰家”。

それより“テレパス念話”で話すくらいならばとっと起きんか馬鹿者。

「むゝん…」

「ほらお兄ちゃんワガママはダメだよ。お母さんが起こしに来るよ?」

「起きてますよええ起きてますともほらすっぴーもさっさと起きろ」

「!? にゃー!」

母殿が来ると聞くや否や飛蝗のような無駄に華麗な跳び起き動作だが儂を放り投げるな!

上手く妹殿が受け止めたから良いものの、儂の麗しい脚が折れたりしたらどうするつもりだ!

「そこにいたのが悪い」

「儂のせいにするか!」

「危ないよお兄ちゃん。すっぴーもビックリしたよね?」

「んにゃあ…(全くだ)」

「すぐ行くって母さんに言っというて。それとおはよう」

「はいおはようございます」

早よう朝食にありつきたい。機嫌が悪い? 主にミツキのせいだ。気にするな。

それとミツキはとっとと着替えて卓に着け。

「お母さん、さっきお兄ちゃんがすっぴーを投げ飛ばしたんだよー?」

「あれは投げたんじゃなくてトランポリンの要領でだな…」

「はいはい、いつものじゃれ合いはそこまでにして、早く朝御飯食べちゃいなさい」

「はーい」
「あい」

「……やはりミツキはまだ気持ち切り替えられんか。
まあ……、良くも悪くも甘い奴だ。」

「……」
「……むう」

隣で妹殿がむくれてるが、気にかかる余裕も無いか。
……その様子を見兼ねてか、母上殿がミツキに声を掛けた。

「ミツキ」

「シアは可愛い良く出来た妹ですことですよわ」
「うん、許しゅ！」

妹殿よ、噛んだな。

「ごちそうさま。そして行ってきます」
「あ、待って！」「ごちそうさま！それで行ってきます〜！」
「はい行ってらっしゃい」

さて、儂も出るとするか。家に居てもやると言ったらナンスイイ殿
と電子の海で波乗りする程度だ。
ならば、儂のやる事は……

「……にゃあ」
「ええ。スピネルも行ってらっしゃい。……気をつけてね」

母上殿に見送られ颯爽と道に飛び出す。

何故儂を見送るのか

それは“母上殿は事情を知っておる”からだ。

「ミツキの事、宜しくね」

「承知致した」

「ミツキ」

「…ん？」

「いつまで引きずる気だ」

「…俺が死ぬまで」

「戯け。確かに儂は記憶に留めておけとは言ったが、引きずれと言った覚えは無い。何度言わせる気だ」

こっそりと二人の後をつけ、念話でミツキに語りかける。相も変わらずこやつは少々他人を気にし過ぎる。他人に甘いと言うのか…。

「…助けられなかった」

「仕方あるまい、どうしようもなかったのだ。魔女を殺れただけ良しとしろ」

「……………」

今までも同じような事は何度もあった。魔女の口づけによって魅入られた人間を見殺しにしてしまった事は。救える場合もあったであろう、しかし現実是非情だ。運よく助けら

れたとして、今後、また同じ目に遭わないとは言切れん。そしてまた救って、また標的とされ……。

こんな螺旋が起きる不安要素があるのならば、いつその事喰われてしまった方が余程……はあ……この話はもういい。

「ミツキ。二度と忘れるな、覚えておけ。

お前と儂には叶えなければならぬ事がある。儂らはその為に他人の命を弄ばなければならない。解ってるいるな？」

「……ああ」

「その命を忘れるな。忘れなければ――」

「忘れなければ死なない、だろ」

「そうだ」

人は二度死ぬ。

一度目は肉体の死、二度目は記憶から消える時。

気休めかも知れんが、これが儂らに出来る最大の供養だ。

……詭弁か、単なる正当化か。

「……学校終わったらすぐ行く」

「うむ」

儂らに正義など無い。

あるのは幾多の屍に築いた先にあるであろうパンドラの箱だけだ。

改めて、よろしくな（前書き）

改めての投稿になりました。
再投稿になる前は約四ヶ月空きました…。

改めて、よろしくな

「はあ……」

思わず溜息が漏れる。思ったより大きかったから自分もちよつと驚いた。

「……お兄ちゃん、何かあったの？ 朝から様子変だよ？」
「ん、ああ……いや、大丈夫さ。心配しなくてもな」

ああやっぱシアには気付かれるか。いや、シア”にも”か。母さんは勘が鋭過ぎるから隠せないけど、そこら辺シアも似たんだろうな。

「ホントに？ てゆゝか絶対ウソでしょ。顔に書いてあるもん。何かあって疲れてますって」

「……まあ確かにあったはあったが何でそう的確なんだよ」
「だってお母さんの娘だし、お兄ちゃんの妹だもん」

エッヘン！と言う擬音が見えそうな程誇らしげだなシア。
しかし、これは何があっても妹にや相談出来ない事だ。悪いがこればかりは、ね。

「……ん。話せない、か。それならもういゝよ」だ
「おい前見て歩けよ」

むくれてプイッとする姿は可愛らしいとは思うが前見て歩きなさい。
ぶつかるぞ

「きゃっ！？」

「はわっ!？」

ほら言わんこっちゃない。

誰かとぶつかって転んでしまった。我が家のドジっ娘は今日も元気です。

「おい、大丈夫か？」

「あわわ、ご、ごめんなさい、大丈夫ですか!？」

「う、うん、平気……、あれ？ シアちゃん？」

妹とぶつかった当人……

“まどか”と“さやか”、“仁美”だった。

「ああ、まどかさん!ごめんなさい、私よそ見してて……」

「ううん大丈夫だよ。気にしないでシアちゃん。怪我してない？」

「はい、私は大丈夫です……。本当にごめんなさい……」

「注意はしたからな」

「アンタも案外冷たいじゃんミツキお兄ちゃん？」

「うっせえ」

「まあまあ、怪我が無かったんですから良かったじゃないですか」

まどかはシアを氣遣ってくれるがさやか、テメエは黙つとね。仁美は相変わらずだが。

“鹿目 かなめ まどか”

“美樹 しづき さやか”
“志筑 ひとみ 仁美”

こいつらは昔馴染み……、というか小学生から同じクラスで友人だ。家が近い訳じゃないが、いつの間にか仲良くなってたって感じが。妹も良くしてるし。

「シアちゃん、ミツキに何か言われた？」

「はい？」

「いやさ、シアちゃんがミスするって事は大概ミツキ絡みじゃん？何か言われたんなら、このさやかお姉ちゃんに言ってみなさい！」

「いいんですか？それがねーさやかお姉ちゃん、お兄ちゃんがねー」

「なにいつ！？下着を盗まれたあ！？おのれ乙女の敵！！」

「さやか、お前は悪乗りすんな」

……仲良いのも困りものだけだな。主に困ってるのは俺だけど。

そしてあれやこれやと俺がイジられてる間に学校に到着。

うちの学校は最近、といってもいいのか、まあとにかく新しく建て直された。

最新設備がうーだらこーだらと言ってたんだが、あまり興味無かったから聞き流してたな。……学校が変形したりするなら話は別だ。

「そつえば、ミツキ君はお聞きになりました？ 今日転校生がいらっしゃるらしいんですの」

「へえ、珍し…くはないけど、興味は無いな」

「まあアンタが興味あんのはゲームぐらいでしょ」

「さ、さやかちゃん…」

さやか、ズバリの射たな。

確かに俺は重度の遊び人だ。ゲーム類に漫画、アニメがとにかく大好きだ。因みに今鞆の中身は携帯とか携帯ゲームとかカードケース×3と最低限の筆記類のみだ（ ）

（因みに、およそ四十枚前後のカードデッキを三つだけでもそれなりに重さがあります。+携帯機に充電器など積めたら、”それが”重い”に変わります。経験談）

他愛もない会話をしながら通学路を五人で行く。別段変わった事はない。いつもの光景、いつもの日常だ。まあ敢えて変わった事を挙げるなら――

「あ、まどかさん。リボン変えました？」

「え？ まあ、うん……」

「ほほう、仁美みたいなモテモテになるためにリボンからイメチェンですか？」

「ち、違うよっ！これはママが」

「そんな可愛いリボン付けて……さては、ママさんからモテる秘訣を教わったな？！」

あの人ならまどかに何か叩き込むのも造作もないんだろうけど、どちらかと言えば「アンタも中学生なんだからちったあ外見を気にするんだよ。舐められたら負け」とか言っただろうな。んで、渋々、ではないだろうけど付けたんだろう。

「実にけしからん！」

「でも可愛いです！」

「ならばシアちゃん、どうするかは分かっているな？」

「心得ております！さやか隊長！」

「よろしい！まどかのようなハレンチな娘にはあ……こうだっ！かかれっ！」

さやかとシアが手をワキワキさせながらまどかに飛び付いた。先に飛び付いたさやかを紙一重で避けたまどかだがすぐにシアに捕縛され、じゃれつきが始まった。

「や、ちょ！？二人とも、や、やめ…あははは！」

「わははは！可愛い奴めえ。でも男子にモテようなんて許さんぞ？」

「許しませんよ？」

…… 本心を言つと朝から目の保養なんだが、まあアレだ。

「まどかはあたしの嫁になるのだ！てか割とマジでなってくれると嬉しいな！」

「お前マジで言つてんのかさやか。ならば色々準備せな」

制服の内胸ポケットからメモ帳、外胸ポケットからペンを取り出す。さあて忙しくなるな、別の意味で。

別に式場を云々じゃないからな？

”ネタに困らない” ってやつだ。

「いゝな、私もまどかさんみたいなお姉ちゃん欲しいな。……」

まどかさん、お兄ちゃんと結く「おい馬鹿やめろ」え？」

妹の満足の為まどかと…だなんてまずまどかに失礼だろうが。てかうちの母とまどかのママさんに、んな事話したら本気にしそうで怖い。今のところ魔女より怖い。

ふと仁美の方をちらりと見ると、呆れてるような、仕方ないなというような表情に溜息一つ。仁美もこちらをちらりと見てきたので…
…仁美に目配せする。

「（そろそろ止めるべき）」

小さく頷くと、仁美が咳ばらいを一つ。正気に戻った三人。ここは天下の往来、通学路であって場所を弁えようか。場所が場所なら延々続けてもらって構わないけど。

そして、予鈴のチャイムが鳴り響く。

—
—
—
—

少し移動して現在教室。縦五列、横五列の二十五人クラスだ。少ないと感じるのは、やはりここが特殊だからだろう、きっと。
そしてその教室だが、壁がガラス張りなんだ。慣れれば何ともないんだが。

あと因みに俺達の席位置は、ホワイトボードを正面にして左から二列目の三番目。後ろがまどか、左がさやか、左後ろが仁美だ。

そして、朝から有り難くも聞きたくない、担任の早乙女さおとめ 和子先生かずこのお話が始まった。

「んんっ。今日は皆さんに大事なお話があります。心して聞くように！」

妙に気合入ってんな…。これはアレだな、寝入るか。
気付かれないように目を閉じ狸寝入りの準備。

「——目玉焼きとは、固焼きですか？半熟ですか？はい！三峰君！
答えなさい！」

（なんでピンポイントで俺なんだよ…）

皆の視線がこちらに向く。…んな期待したような目で見るな。何を期待してんだおめえらは。

「…あゝ、どっちでもよろしいんじゃないっすか？」
「その通おゝりッ！！どっちでもよろしい！！」

だろうよ…。

ここでどっちかを選択すると漏れ無くクラス全員からひんじゅく颯の嵐だ。

「たかが卵の焼き加減ひとつで女の魅力が決まると思ったら大間違
いッですッ！！」

教鞭がへし折られた。あれ簡単には折れないような素材で出来てた
ハズなんだがなあ…。

（記録は三ヶ月と二日っ。珍しく長持ちした方だよな）

登校中に書いていたメモ帳とは別の取り出し、書き記す。

これは自分用のネタ帳ではなく、学校時事専用のネタ帳。

小さい事から各々の先生方の小言まで、幅広く収集している。一応広報部に所属（仮）している為聴取は欠かさない（しかし転校生が来るという情報までは把握出来なかった訳だが）。まあ、昔スピネルに注意深く周りを散策しろと言われてやりはじめた事が癖になって、広報部の目に止まったと。閑話休題。

「女子の皆さんは、くれぐれも半熟じゃなきゃ食べられな～いなんて吐かす男とは交際しないように！」

半し字型に折れ曲がった教鞭を振りかざすその姿は到底教師とは思えない哀愁が漂っている。

「ダメだったか…」

「ダメだったんだねえ」

「しかし相変わらず別れる理由がアレだよな…」

さやかがこちら側に呟くように呆れ、応えるようにまどかも苦笑する。

「んんっ！」

おっと、聞こえてしまったか
まあいいけどさ…。

「そして、男子の皆さんは絶っっ対に！卵の焼き加減にケチをつけるような大人にはならないようにッ！特に！三峰君！」

「俺関係無いじゃないっすか！」

酷いとばかりが来たもんだ。俺は文句は付けないが不満は言わない、意見を述べるだけだ。理屈っぽい？聞こえんな。

「…はい。後それから、皆さんに転校生を紹介します」

「そっちが後回しかよ！」

さやかの的確なツツコミが入る。

転校生紹介を私事の後回しにするとか、何と云うか……。なんにせよ、噂の転校生と顔合わせだ。そっぴや、仁美は何処で情報を聞き付けたんだ？

「じゃあ、曉美さん。いらっしやい」

左前方の扉が開き、噂の転校生が入ってきた――。

クラスがざわめく。

「うわあ、スゲー美人」へえ、綺麗な娘だな。あのさやかも驚くぐらいだ。

腰まで伸びた黒髪と何かを見通すような鋭い瞳が印象的だ。

「…っ」

後ろでまどかが息をのむのが解った。…知り合い？ いや、そういう訳ではなさそうだ。

「はい、それじゃあ自己紹介いつてみよう！」

「^{あけみ} 暁美ほむら」です。よろしく願いします」

先生がボードにあけみさんの名前を書き出す。

（ふん、暁に美しいであけみ、ね）

そして”ほ”まで書き出して止まった。どうした先生。何だ？と思ったが、あんまりにも簡素な自己紹介だったためか「え？それだけ？」って理由で止まったのだろう。多分。

すると、暁美さんが先生からペンを取り上げ、残りの”むら”を書き出し、こちらに向き直り一礼。クールビューティとか言うやつだろうか

……………何だろうか、こちらを見てる？ 後ろのまどかの事も見ている気がする。

「ええ…つと、暁美さん？、暁美さんの席は「分かってます」…え？ はあ…」

自分の席を知っている…？

何か言いたげな先生をスルーして、勝手に席に着こうとする

しかし何故かこちらに向かってくる。あなたさんの席はあっちの方なんですけどねえ…。

「……………」

「……………何か？」

立ち止まった。

しかもまどかに視線を向けたかと思ったら、またこちらに向けてきた。何だっただ、初対面の相手に怨まれるような事した覚えは無いんだけど。

「……あの時はありがとう」

「……悪いが覚えのな——」

（どういたしまして）

……は？ 何だよ？

いや、マジで何でその言葉が出て来んのよ？

しかも何で返す？ いやまだ返して無いけど、俺は暁美さんの事を知らないのに、今言おうとした言葉、完全に知り合いだよな……。どうなってんだよ……！？

「——どういたしまして、って言った方がいいのかな？」

「……………」

暁美ほむらは何も言わない。

焦ったような表情は出して無いハズだ。

でも、この言い知れない“何か”は何だ？

そしてなんのリアクションも返さずに指定、知っていた席に着いた。

…調べるべき、か？ もしくはスピネルに相談するか。

一、二時限の授業が終わり休み時間。やはり話題は転校生である暁美ほむらに集中した。所謂質問攻めだ。

「暁美さんって、前はどこの学校だったの？」

「東京の、ミッション系の学校よ」

「何か部活とかやってた？」

「運動系？文化系？」

「やってなかったわ」

「すごい綺麗な髪だよねえ。シャンプーとか何使ってるの？」

「不思議な雰囲気の人ですね。暁美さん」

「まあ…。で、ねえまどか、ミツキ。二人ともあの子知り合い？」

「さつき、まどかはガン飛ばされて、ミツキは感謝されたじゃん」

「正直言つと初対面」

「いや、まあ…えっと…」

まどかはやっぱりどっかで会ったか見たんか。言つべきか言わざるべきか迷ってる感じだし。

「ごめんなさい、何だか緊張しすぎたみたいで…、ちょっと、気分が…」

……おそらく嘘だろうな。

まあ口実としては良いとは思うけど。

「保健室に行かせてもらえるかしら」

「えっ、あ、じゃあ私が案内してあげる！」

「あたしも行く行く！」

あいつら連れてってどうすんだ——むっ！ネタの香りがする！

「いえ、おかまいなく。係の人をお願いしますから」

席から立って有無を言わず道を開けさせる。スゲーなホント、クルだよなあ。……んで、こっちに向かってくる、と。

「ふえ……」

「ん？」

「……………」

若干まどかが怯える。まあいきなりアレだったから仕方ないが、まどか…暁美さんにも”何かある”なこりや。

「鹿目まどかさん。貴女がこのクラスの保健係よね」

「えっ、あ、えつと、あ、あの……」

転校初日でいきなりまどかを保健係って断定してきた。「よね？」という不定じゃなく、断定。クラスの誰が何に就いてるってのは教えてないはずなんだが……、先生？ いや、あの先生にそんな器用な事が出来るはず無いだろうし……。

「連れていってもらえる？ 保健室」

その上、ちよつと来いとも言わんばかりの鋭い視線でまどかを見る。…ちよつと待ってもらうか。何か危ない気がする。

「なら、俺も同行するわ。一応俺も保健係だからな」

これは嘘だ。まどかを一人にしたら何されるか。ましてや連れてけと言ったのは”初対面の転校生”だ。

「そう。でも保健係が二人も付き添うと、大事になってしまっわ」

「あ…あのミツキくん。私一人で大丈夫だから…」

「……そうか？ なら任せた」

そして、暁美さんはまどかを連れて教室を出て行った。

まどかにああ言われては引き下がるしかない。下手に食い下があれば暁美さんの警戒心を強めるばかりだ。

…ま、元々かなり警戒心が強いみたいだけど、今の言動で大体把握した。

「…なにアレ。アンタが言い負けるなんてね」

「まどかを味方に付けられちゃしょうがない。でも多分、まどかが言わなくても言い負けてただろうな」

「えっ、マジで？ …仁美はどう思う？」

「ええ、何と云うのでしょうか、あのミツキ君が…という感じでしょ
うか」

何と云うか…、俺に何を言えばこうなるってのが知られているとい
うか……おかしな話、口論に持っていく前に終わるだろうな。

「な〜んか怪しいんだよな〜、あの転校生」

「暁美ほむらって言ってただろ？」

「別にいいの」

「でもせめてお名前はちゃんと言ってあげないと」

「む〜…、気が向いたらね」

…なんだそりゃ。

まあとりあえず、この事はスピネルにそれとなく言っておくか。何かアドバイスをくれるかもしれないし、

…ああ、シアはどうするか。

あんま人様との壁を厚くすると言われてるけど、こればかりはね…。ウチのクラスに転校生が来た、ただけ言えればいいか。…いや食いつかれるな。

「それより、帰りにまた寄り道してかない？」

そんなこんな思考してたら、さやかが提案してきた。まあいつもの寄り道の事だ。

「…ん？ ああ、いつもの場所でいいのか？」

「モチ。仁美も良いよね？」

「はい、構いません。でもまどかさんは…」

「誘えば来るさ」

そして、授業再開。

ここで俺達は暁美ほむらのステータスを知る事になった。

「三時限目：数学」

計算がめっちゃめっちゃ速い。

しかも式、答まで完璧。

次々と提示される問題をスラスラ解いていく。

「うはあ…マジで？」

「さやかじゃ勝てないわな」

「うっさいわ！」

「四時限目：体育」

高跳びで県内記録を出した。

走るフォーム、踏切、体勢、受け身も完璧。なんだありや。

「み、三峰君、今の記録って…」

体育の担任である遠藤先生がこっそり聞いてくる。陸上部の顧問でもある遠藤先生ならもう分かりきってだろうけど、信じられないよ
うなので決定付ける。

「あゝ…。軽く県内記録突破してますね」

「…うそお」

嘘じゃない。前に広報部で、大会の近かった陸上部の事を取り上げた時に確認したし、実際その記録を出した人物に会って話も聞いた
だから。

「ふえー、運動も完璧ですか」

「さやかが勝るものは胸のみ、と」

「変な事書くな！あとなんだアタシ二連敗か！」

「ま、まあまあ……」

「でも本当に何でも熟せてしまうんですね、曉美さんって」

仁美の言うとおり、曉美ほむらは文武両道の凄いやつだった。

文の方は仁美が負けてはいはず。運動はさやかが出来るが、ああまでとなると……。

——ところで、記録云々は男子女子別れて行うわけだ。で、ここは”女子のグループ”だ。

なぜ野郎がいるのかと言われると

「曉美さん、意外とスタイル良いよな」

「三峰、目測してきてくれよ」

「は？」

「ごめ〜ん！男子の方から、誰か記録付けてくれる人貸してくれる〜？」

「三峰を行かせま〜す！」

というKENZENな男子の要望（欲望）があつたためだ。たしかに大体のスリーサイズを目測出来るが記録なんてしてない。誰がやるかってんだ。……他の女子達に黄色い声を浴びながら、こちらに視線を向ける。……まどかを見ているのか。

「ひう！？」

「お、おい」

「おっとと」

まどかが怯えて俺とさやかの背後に隠れる。まるで小動物だ。

まあ睨まれてるように感じたんだろうか、仕方ない。…ま、あの保健室の一件からまどかの様子がおかしかったし。

とにかく

周囲は「暁美ほむらは凄い」

俺達は「暁美ほむらは変」

という事を確認した一日となった。

――
――
――

放課後。

さやかが言ってた寄り道をする事に。まどかも来ると快諾した。

その寄り道とは、まあ近くにあるプラザの三階にある喫茶店で食べる事だ。

そして話題は噂の暁美ほむらとまどかの一件の事になった。

「……ええ！？なにそれ！？」

「何が言いたかったのか理解しかねるなそりゃ」

「やっぱ訳わかんないよねえ…」

何だか気疲れしたように肩を落とすまどか。まあ気持ちは解らないでもない。

「今が大事なら変わろうなんて願うな。安易に変わろうとすれば全て失う、てどこか」

「…わかんない」

「俺達だつて解らねえさ。俺は要点っぽいのをまとめて簡潔にしてみただけ。でも憶測だけだな」

ふむ、一体何が言いたかつたんだか。まさか稀に聞く厨二病？…
無いか。

「文武両道で才色兼備かと思いきや、実はサイコな電波さん！くあゝ！どこまでキヤラ立てすりゃ気が済むんだあの転校生は！？萌えかあ！？そこが萌えなのか…ッ！そこら辺精通してるミツキ先生はどうお考えなのよ！」

「俺に振るんじゃねえよ」

一気にまくし立てて最終的にソツチ方面にたどり着くんかさやかさんよ。仁美が苦笑いしか出来ないじゃねえかよ。

「まどかさんとミツキ君、本当に曉美さんとは初対面ですか？二人とも、それが気になってるんですわよね」

「ん。それは俺も気になって、たつと」

「あ！あたしのポテト…！」

文句を言わない代わりにさやかかのポテトを一本掻つ攫う。「返せ！…なんて叫びが聞こえたが無視。」

「相談料」

「何の相談だ！…ああ転校生についてか」

やっぱ仁美もそれが気になったみたいだな。代弁感謝。さやかがぶくたれてテーブルに突っ伏したがスル！。

「うーん、常識的にはそうなんだけど…」

それを聞いてガバツと顔を上げるさやか。立ち直り早いな相変わらず。

「なにそれ。非常識な所で心当たりがある？」

非常識な所、か。なかなか良い質問の仕方だなさやか。非常識な所といえば……

「あのね…タベ、夢の中で、会った…ような…」

・
・
・
・
・

「あはははっ！」

「あははっ」

「すげえ、まどかまでキャラが立ち始めたよ！」

「ひ、酷いよお！私真面目に悩んでるのに！」

ちなみに俺は笑ってないぞ。夢の中、か。不思議な事もあるんだな。…人の事は言えないが。

「あーもう決まりだ。それ前世からの因果だわ。ある時、時空を越えて巡り会った運命の仲間なんだわ！」

「言い過ぎだボケ」

ちよつと分厚いネタ帳でさやかの額を小突き、脳天を叩く。

「あ痛ッ！？二発！？」

「自業自得だ。からかうにしてももう少し言葉を選べ」

「む、悪かったわよ。ゴメンまどか」

「あ、うん…。大丈夫だよ」

「ところで、その夢って、どんな夢でしたの？」

さやかを戒めたところで、仁美がまどかの見た夢について質問をする。流石メイン進行役だ素晴らしい。

「それが、何だかよく思い出せないんだけど、とにかく変な夢だったっただけで」

ふむ。肝心の中身が曖昧じゃあ何とも言えないな。どんな事でもいいんだよな、どんな風に会ったのかったのでもいい。

「もしかしたら、本当は暁美さんと会ったことがあるのかも知れませんが」

「それも一理ある」

「え、会った、ことが？」

「お二人自身は覚えていないつもりでも、深層心理には彼女の印象が残っていて、それが夢に出て来たのかも知れません」

ああまあ、仁美が言いたい事は大体解った気がする。

「それ出来過ぎてない？　どんな深層心理よ」

「ふふっ、まあ、そうね…」

「あながち間違いでもなさそうだがな。よくある話じゃないか、一瞬しか会わなかった人が何で、とかいう。ま、確かに出来過ぎかとは思うが」

「むむ…。あ、そうだミツキ、あんたの情報網で転校生の事探れない？」

「やらない」

「なんでよ」

「プライバシーがあるからな」

「なぐんだ、期待して損した」

……実は体育の終わりの時、職員室にいた早乙女先生に頼んで（だまくらかして）書類を見せてもらった（盗み見した）。

結果は”白”。おかしな点を挙げるなら、最近まで伏せていたのにあんだだけの学力と体力ぐらいか。

「ミツキ」

——突然、スピネルからの念話が聞こえる。

「どうした」

「魔女の気配だ。近いぞ」

「…マジかよ」

それは困ったな…。今ここにはまどか達がいる。上手く動かせないか……

「……あら、もうこんな時間。ごめんなさい、お先に失礼しますわ」

仁美が携帯の時刻を見て、荷物をまとめ始める。仁美はお嬢様である故、お稽古事に忙殺されそうなんだとか。…良いタイミングだ。

「今日はピアノ？日本舞踊？」

「茶だろう」

「あら、ミツキ君正解です。お茶のお稽古なんですの」

「あんたなんで知ってんの…ってそっか、前にボディーガードか何か頼まれたんだっけ」

まだ小学五年くらいの時に、仁美の親御さんと話す機会があった。母とも面識があったらしく、久々の再会に意気投合。暫く仁美の稽古に付き添うはめになったんだっただか。

「ミツキ君も来ます？」

「謹んでお断りするわ。師範にそう言っといてくれ」

「先生が残念がられますわ」

「やる気ゼロ」

「ふふっ、そうでしょうね」

やらされた時「素質がある」だの何だの言われたが逃げた。

「しかし、受験近いのにまだやってるんか」

「それが悩みですわね。いつまで続けさせるのか…」

意外と親御さんも過保護で頑固だからな、仕方ないっちゃ仕方ない気もする。

「それじゃ、私達も行こっか」

「ああ、まどか、ミツキ」

「ん？」

席を立つ時、さやかが身を乗り出してやや小さい声で話しかけてきた。

「帰りにCD屋寄ってもいい？」

「ああ上条絡みか」

「また上条君の？」

「にひひ…まあね…」

照れ笑いするさやか。

上条つてのはクラスメイトなんだが…諸事情で学校に来られず病院にて養生中。

んで、さやかはかいがいしく足を運んでいると。

「通い妻だな」

「う、うっさい！」

「さやかイジリはここまでにして…。すまんが用事が出来た」

「用事？ シアちゃんから？」

「それもあるが、別件」

もう分かっているとは思うが、シアはここにはいない。理由は？委員会の集まりで来れない？更にその後母の買い物に付き合うため

以上の理由である。

しかし、既に昼休みのメールで知らされているので、今は口実作りだ。

「あんたがシアちゃんの代わりに買い物ねえ。ちゃんとできんの？」

「あのな、昔から家事手伝いしてた俺に隙は無い」

「そうだよね、ミツキくんの手料理も食べたじゃんさやかちゃんも」
「あゝ、そういえばそうだったわね」

コノヤロウ…。

まあとにかく、まどかとさやかとはここまで。CD屋の前で別れる事に。

「じゃあミツキくん、気をつけてね」

「ちゃんとお使い済ませるんだぞ」

「そっちも気をつけてなまどか。さやかはちゃんと上条に甘えてこいよ」

「うつさいうつさい！とつとといっちなまえ！」

「はいはい、またな」

「またね」

「じゃあね」

最後に軽く手を振って別れる。

さて……

「遅い」

「悪かった」

ある路地裏で、猫のような動物がフェンスの上にいた。スピネルだ。

「指定場所がややこしいんだよ」

「お主がさつさと来ぬのが悪い。でなければこのような所など…」

「はいはい分かった分かった。…案内よろしく」

そう言うときスピネルはフェンスの上を早歩きで奥の方行く。

「ついて来い」

「了解」

「ここらって、さっきいた所の裏手辺りか？」

「この辺りだ。微かに気配がする」

裏手というか、完璧立入禁止区域じゃねえか。警備がいないとかなんてザル警備。

辺りは薄暗いし、照明がなんか不気味だし…。ここ本当に裏手かよ。

「気配が動いたぞ」

「どっち行つた？」

言うが早いか、スピネルが反対側の建物に目を向け、跳んで建物の窓辺に降り立った。

「この中だな」

「あいよ。んじゃスピネル」

「承知。逃がすなよ？」

「出来たら、な」懐から“黒いキューブ、エフィケイア”を取り出す。

「起動」

スピネルの一言でキューブが震えだし、淡い光を放つ。スピネルも淡く光りだし、少しずつ粒子となって俺の身体の周りを取り巻く。一瞬発光したらずぐ収まり、学生服から一瞬にして黒いマント付きの黒いファンタジックな服装に変化し、キューブはカチャカチャと音を立て瞬く間にやや細身の剣に形を変えた。

「よしと…」

このエフィケイア、中々便利で、ある程度自由に形を変えられ、折り畳む事も出来たりする。早速半分に折り畳み、腰に装着する。

「正攻法だ。窓を破れ」

「いやその理屈はおかしい」

因みにスピネルは花のブローチになっていて、念話で会話をしている。

窓破って警報鳴らされちゃあ堪ったもんじゃないから…、先程の窓の二つ上の窓辺に跳び移る。足場が不安定だがそこはアレ、強化された身体能力で何とかなってるのさ。

「……中は、と…」

内部を見渡すが暗くてよく分からん。ここは物置場所なのか、遮断バーやらコーンやらブルーシート、看板と色々放置されている。

「さてどうするやはり破るかそうかそうか」

「結論早過ぎ。まずは……？」

不意に内部から何かが落ちたか倒れたような音が聞こえた。…中に誰がいるのか？

「破るぞ」

「そうこなくてはな」

「ピクシバカテル」

エフィケイアを展開し、形を変化させる。ピクシバカテル…、早く言えばコンパスカッターだ。

軸になる部分を窓の中心辺りに当て、刃の部分で円を描く。

「お店の人ごめんなすって」

「気にする事無いと言っに」

切り取り完了。エフィケイアを再び剣に変え、片手で軽く窓を押す。すると何の抵抗もなく内側へと落ちた。

当然円形状に切り取られた窓は落ちて割れる。やっちまった綺麗に粉々だ。

「近いぞ」

「ああ。後で窓直しに来ような」

内部に侵入成功、と…。

たしかに気配を微弱に感じるが遠いな。

「奥だな」

「了解。誰かいるなら急いだ方が良さそうだ」

奥へ進む程気配は少しずつ強まっていく。空間も所々結界が見え隠れしている。

「ここってこんな広かったのか？」

「空間が歪み始めていている証拠だろう」

思ったより内部が広くて探すのに手間取るな。正直、向こうから来てもえれば手間も省けるけどそうも言ってられないし……。

「…来た」

と思つてたら来た。

辺り一面が不可解な空間に飲み込まれる。

「ほう、魔女がいるな」

「そいつはラッキーだけど、まず先に誰かいるんだつたら安否確認が先だ」

そう決めたら即行動

一気に走り出す。

辺り一面、目に毒で、蝶や茨、街頭、ビル、馬車、フェンス……もう理解が追い付かない程。

所々まだ現実の部分は、紙を破るかのように剥がされていく。まるでこれが本当の現実だとも言つように。

「使い魔だぞ」

「蹴散らす!」

前方を毛玉に髭が生えた異物が遮る。スピネルの勧告を聞いてすぐさまエフィケアの形を変え、奴らに向かって“照準を合わせる”。変えた形は

少し“大型のショットガン”

「粛清ッ!」

「εκκθ·απλση(粛清)」

気合を込めて魔力の弾丸を放つ。

使い魔は個々が弱いが、雑魚だからと手は抜かない。…いや、なるべし、軽めにあしらう。

<Das sind unbekannte Blumen>

<Ja, sie sind mir auch unbekannt>

<Schneiden wir sie ab>

<Ja schneiden doch sie ab>

<Die Rosen schenken wir uns
er Königinn>

「こいつら何て言ってるんだ？」

地面を蹴り、空中から髭毛玉の集まりに向かって三連射する。大半を撃ち抜いた、残りは慌てたように散って行く。

「儂らを花だと思ったようだ」

「花ねえ、つと」

一回転して着地、すぐさま走り出す。

まだ何も、誰も見えないがとにかく奥へ向かって走る。

魔女の位置はスピネルが大体分かっているが何分迷路だから、とにかく前へ進むしかない。

「まただよ」

「構うな、蹴散らせ」

「あいよ」

小脇に抱えているエフィケイアをショットガン形態から変形させる。銃身を半回転させグリップ部分を前に、銃身の下部をスライドさせて新しいグリップを出現させ、そのやや上の部分にも同じくグリップを出現させる。

「よつと…、ジャック展開！」

先程前にしたグリップが反転し、内部から銃身の半分以上あるナイフが下から飛び出す。

「さて行きますか…！」

走る速度を上げ、姿勢を低くして一気に接近する。そして右の小脇に抱えたエフィケイア・ナイフ状態を振り上げ…、下から掬い上げるようにしてスピンスつつ薙ぎ払う。

「強行突破」

「とつとと行け」

行く道を邪魔していた集団部分を鮮やか（↑ここ重要）に斬り抜けて先を急ぐ。ああいう芸当が出来るのもスピネルのおかげだったり。

「これ以上群がられても時間を浪費するだけだ、適当にあしらえ」
「これでも適当なだけだな」

奥へ奥へと進むにつれて空間がどんどん病んでくる。それほど中心騒ぎの元に向かつてるってことだ。

実際問題、結界が消えないって事はまだ魔女がここにいる訳。ラッキー…でもないが、被害者がまだいるのにも変わりはない。

今はナイフ形態からまたショットガン形態に変えて、進行ルートにいる使い魔のみを撃ち抜いている。数は減っているが、魔女がいる限り無限に湧く。何年続けててもこればかりは面倒でしょうがない。

「見るスピネル。広い所に出るみたいだ」

「用心しろ」

「了解」

ショットガンの手先台を手前にスライドして排莖、そして元の位置

に戻す。

…このスライドアクションが堪らなく素晴らしい。ポンプ式とかオートマ式みたいのもやってみたかったが、スピネルから

「また今度にしろ」

って言われた。なんか買いたいものをねだる子供の気分だった。

んで、早速広い場所に出たら誰かの声が聞こえた。使い魔の声じゃなかったし、巻き込まれた奴か？

「……………！？」

「……………？」

二人か？ てかどっかで聞いた事あるような、ないような。…いや、これはフラグだよなあ…。

「近くのものに身を隠せ。見られたら厄介だ」

「わあってるよ」

言われるまでもなく、近くにあった柱？つばいのに身を隠す。アレだ、カバーポイントってやつだ。

「準備準備……………」

そしてフシギなところから“仮面”を取り出す。実はこれ、何も隠す必要は無いんだが……長くなるから、三行説明。

？不良の魔法少女に絡まれたうわこわい

？あんなのに顔割れたらマジでヤバイ

？無用なトラブル回避のため顔と声を隠してみた

てな理由なのよ。結果は良好。

仮面を付けてから一切不良少女の襲撃を受ける事は無くなった。しかし逆に仮面を付けてると解りやすいから問答無用で即喧嘩〜ってなカタチになっちゃうんだよな…。

しかも付いた通り名が――

「“ピエロ”ってどうなんだよ…。顔、てか仮面しか見てないだろ
どうかんがえても」

「変態などと呼ばれないだけマシだと思えばいい」

そりゃそうだけど……

まあとにかく仮面を装備して、乱入する算段を…と思ったが、そんな余裕は無いみたいだ。剪定鋏をガチガチさせて歌いながら？ジリジリと距離を詰めている。

「ったく…『巻き込まれたのは何処のどいつだよ』」

仮面から通して聞こえる声は、普段の声とは違い幾分低く、ややノイズ混じりの声になる。ラジオや通信機を通して聞こえるって言えば伝わるか？

『……!?!』

使い魔共が誰に向かっていているのか覗き見てみると、若干後悔、焦りが三割、残りは優しさ…いや、何故?という疑問が浮かんでくる。

「じ、冗談だよね…」

さやかとまどかだった。

よりによって何であいつらが…。

「あたし、悪い夢でも見てるんだよね…?!　ねえまどか!?!」

残念だが現実だ。…正気を持って紛れ込んだ、のかは不明だが。

『…なんでまどかとさやかがいるんだ』

「知らん。…行くのか」

言われずとも行くに決まってる。そのために、上手く二人を救い出せる銃身と弾を交換する。

「…ほう、良い選択だ」
『だろ?』

散弾じゃ、まず二人に当たる。普通の人間に当たれば怪我じゃ済まない威力だ。だから――

「波動・衝撃弾か」
『フォースガンモード』

銃身の真ん中から下半分を外してひっくり返し、再び装着させる。そしてグリップを手前に引き右へ傾ける。そして新たに飛び出したグリップ、先程ひっくり返した部分の装甲が羽根のように上下左右に跳ね上がる。

弾倉をエネルギーパックに交換して完了。…ごちゃごちゃしてるのは男の浪漫だ！

『よっしゃ準備完了』

「なら行け」

飛び出して撃つ……いやこのまま撃ってしまったら二人を巻き込んでしまう。だから…！

「うわっ!？」

「えっ!？」

柱の影から飛び出し、一足飛びでちょっとカッコつけて二人のもとに降り立つ。

『無事か?』

「ちよ、な、今度は何なのよ!? アンタ誰!？」

『無事かと聞いている』

「だ、大丈夫ですけど、この子が…」

まどかの方を見ると、何か妙なものを抱えている。……猫? いや、だが――

「おい、詮索は後にしろ」

…そうだな、今はこの状況を打破するか。

『…お前達、俺の後ろにいる。突破する』

「え、突破って…、アンタ何する気よ!？」

フォースガンを脇でしっかり固定、前後のグリップとをしっかりと握り引き金に指を掛ける。足腰もしっかり固定。こいつの難点、反動がデカすぎるんだよな

『吹き飛ばす』

「はあ!？」

「…え?え?!」

『第一波』

引き金を引く。

やや甲高い音を立て、爆弾が爆発したような爆音を立て空間を歪ませる衝撃波を放つ。

「ううわあっ!?!?」

「きゃあああっ!?!?」

『…つと!』

危うく吹き飛ばされそうになった。後ろの二人は大丈夫そうだな。

いややっぱこれ使い勝手悪いわ。

しかし威力はピカイチだから狙っていた部分、囲んでいた円の半分以上を粉々にして吹き飛ばした。

『おい、へたりこんでないで立って走れ』

「み、耳が…」
「あうう…」

このフォースガン、威力はある意味トップクラス何だが凡庸性は低い。今みたいに慣れてないと鼓膜が持たない、一発の反動がデカい、連射が利かない、距離が開くと威力が落ちると……まあじゃじゃ馬なこつて。

『ボサツとするな』

「わ、分かってるわよ！」

まどか、大丈夫？」

「な、何とか…」

『あっちの方に向かえ。出口に近いハズだ』

「あ、あなたは！？」

『しんがり殿だ。気にせず行け。お前達の身の安全が最優先だ』

「あ、ありがとうございます…」

『美樹さやか、しっかりその娘を守れよ』

「言われなくても……って何であたしの名前知ってんのよ！？」

さやかの質問をスルーして使い魔の方に向き直って再装填する。

『これを撃つたら走れ、いいな。拒否権は無い』

「でしようね！まどか、あたしの後ろに！」

「う、うん」

さやかがまどかを自身の背後に隠し、いつでも走り出せるように身構えた。上出来ださやか、珍しく頼もしく見えるぞ。

『行くぞ……！』

また剪定鋏をガチガチさせながらこちらへジリジリと近づいてくるヒゲ毛玉達。

今度はやや威力を高めて撃ってやる。

「まどか、走って！」

「うん！」

『第二波！』

さっきよりも力を込めて踏ん張り、引き金を引く。

『…うおッ！』

強め過ぎたか。銃身がちょっと跳ねた上に後ずさってしまったが、その分威力も範囲も増し増しだ。憐れにも粉々になる使い魔共。

〔馬鹿〕

『うつさい』

やや多少ちよつと調整をミスっただけだ大した問題じゃない。

二人は何とかが行ったみたいだな。ならば長居は無用、すぐに追いついて外近くまで護衛しなくては。

善…ではないが急ぐ必要はある。エフィケイアをショットガン形態にして、まどか達の後を追う。…何も起こらなきやいいけど。

だが予感的中。

行く手を遮られて立ち往生していた。しかもかなりの数に遮られていた。なにあの数。

『何だあれは』

「あたしらが聞きたいっての！」

まどかを庇いつつもツツコミを入れる辺り流石と言うべきか。とにかく二人の前に立ち狙いを定め、試しに三発撃ってみる…、が、減った気がしない。

『…ツチ』

スライドして排莢しつつ、どうするかと算段を立ててみるが、どれもイマイチ。

『…お前ら、離れるなよ？』

「は、はい…」

「何とかならないの!？」

『何とかするから少し黙っててくれ。うつさくて敵わん』

「う、うつさい！」

『返せるなら大丈夫だな』

余裕あるようにみえて実のところピンチだ。

何時までもここでモタモタしてたらまた囲まれる、てか囲まれた。早い！もう囲まれたのか！

「あ、あの…！後ろにも…！」

『分かってる。お前達は必ず護るから安心しろ』

エフィケイアを構え直し、周囲を警戒する。だが一斉にかかれたら成す術が無い。潰されておしまい、だが俺とスピネルは助かる。それじゃ駄目だ。

『また走らせることになるが、まだ体力は持つか？』

「まどかがダメになったらあたしが担いでも連れてくわ！」
『良い意気込みだ』

とにかく、出口まで逃げ切るしかないな。今の状況、救助者二名が足枷になつてゐる状態で魔女とは出くわせないし、これ以上二人を巻き込みたくはない。
そうこう考えている内にジリジリと包囲網が狭まってくる。

『使い魔ごときが、調子に乗るなよ…！』

エフィケイアを構え、いつでも突撃出来る体勢を取る。
すると、使い魔共が一斉に躍りかかって来た。…まずい、ちょっと想定外だった。

「っ！？」

「…まどか…！」

——瞬間、世界が突然コマ送りのような、スローモーションに見える。これが俗に言う、刹那って事なのか。

頭はハッキリと考えられ、視界はよりハッキリと鮮明に。

…これは、まさか、駄目なのか？

今までみたいに誰も助けられないのか？

身体は動かない。動かそうにも思考について来ていない。

しかしその刹那の中、自分達を囲むように降り注いだ鎖の音が、ハッキリと見え、聞こえた。

『…！』

「幸いだな。…援軍だ」

スピネルの音が頭に響く。
途端、鎖から溢れ出した黄色の光。それが遮る壁となって、使い魔からを護ってくれた。

光の壁にぶつかり、次々と消滅、或いは吹き飛ばされて行く使い魔。

「危なかったわね」

突如後方からの声に振り返る。その人物は、光る宝石のようなものを手にゆつくりとこちらに歩いてくる。

まあ、誰かは分かってるんだけどな…。

「でももう大丈夫」

「……………」

「あら、“キュウベえ”を助けてくれたのね。ありがとう」

「ともえ 巴 マミ”

ベテランの魔法少女であり、一応共闘戦をやっている仲間だ。

顔を合わせづらいな。知ってるとはいえ失態を晒してるわけだし…

「その子は私の大切な友達なの」

それは初耳だ。随分長く共闘しているけど、あれと一緒にいるなんていうのは聞いた事がなかった。

そして、何故まどかがこんな所にいるのかも解った。

何でも、キュウベえに助けってくれと念話か何かで呼ばれたようだ。
…はた迷惑もいいところだな。

「自己紹介したいところだけど……、ピエロさん？」

『……』

「あなたがいながら、随分追い込まれたみたいね」

『…人命第一だ』

「ふっ、でしょうね。色々と言いたい事もあるけど…」

気付いてみれば、またわらわらと寄ってきていた使い魔共。しかし
まあ、バマミが来たからにはすぐ終わるだろう。

「ちょっと一仕事、片付けてからにしましょうか！」

バマミが黄金色に輝く宝石のようなもの、“ソウルジェム”を翳すと、放たれる強い光にマミが包まれた。

「わぁ…」

『もう出番は無いな。お前達、俺の後ろに下がっている』

バマミを包んでいた光が弾ける。すると元の制服姿では無く、全く
違う服装へと変わっていた。

これが俗に言う“魔法少女の変身”みたいなものだ。戦闘服とでも
言え方がいいか。

変身が終わるや否やバマミに向かって使い魔共が殺到する。しかし
バマミは何処吹く風と言わんばかりに颯爽と跳躍。目標を見失った
使い魔は仲間同士でぶつかり合い、団子状態になった。

「ふっ！」

バマミが空中で手を掲げる。

すると何処からともなく、無数の長銃が出現。銃口は全て使い魔に向けられている。

瞬間、発砲音が響く。

それと同時に、弾けたように次々と撃ち出される流星のような銃弾。一見すれば綺麗に見えるが撃たれる方は堪ったもんじゃない。

…経験者は語るのさ。

降り注ぐ銃弾の流星に成す術無く、使い魔共は撃ち抜かれて行く。

…バマミの銃弾は特殊で、貫通したり、地面着弾すれば炸裂したりと結構融通が効くよう。羨ましい限りだ。

粉塵が舞い上がり、周囲の物から火の手が上がる。そこに、格好よく颯爽と降り立つバマミ。

「す、すい…！」

『相変わらずお見事』

使い魔を一掃すると結界が揺らぎ、元の世界へと姿を変えた。という事は、魔女本体は逃げたか。まあ今回は見逃すのは仕方ない。

…ふむ、周囲を見た限りじゃ結構移動したんだな。

非常口が近いとなると、帰りも助かる。

「助かったあ…」

さやかが安堵の息を吐く。

まあ怪我が無くて何より。

『…ん？』

すると、背後に誰かが降り立つ音が聞こえた。振り向くと、シートが掛けられ積まれた什器の上に――

「……………」

『…お前』

暁美ほむら、その本人がいた。

前に見た制服では無く、バマミと同じような、ファンタジック風味で、白と灰、黒が基調のシックな感じがする服装。

…つまり、暁美ほむらも“魔法少女”だったって事か。

「……………」

何も語らずただこちらを見下ろしている。しかしその瞳からは何処か悲しげな何かが伝わってくる。

「魔女は逃げたわ。仕留めたいならすぐに追い掛けなさい。今回は譲ってあげる」

バマミは顔見知りだったのか？ 口調からは知らない仲じゃないみたいだが…。

「…私があるのは「飲み込みが悪いのね。見逃してあげるって言ってるの」……………」

中々に陰悪な仲だった。

バマミ本人からは何も聞かなかったし…、いや、この姿で聞いた事

自体無かったな。何かしか話し合う前に別れるし…。

「お互い、余計なトラブルとは無縁でいたいと思わない？」

「……………」

ややこしくなる前にとつと失せろって意味なのか、和解…というより威嚇に近いか。

それでも無言を貫く暁美ほむら。…視線を追えば、やはりまどかを見ている。やはり何処か悲しげで、悔しさ？を滲ませているようなそれに気付いてか、さやかがまどかの前に立ち、睨みを効かせている。

「……………」

「……………」

無言の対峙。

今暁美ほむらが動けば確実に巴まみは躊躇い無く撃つだろう。威嚇の類でも掠る程度に留めてくれればいいが。

「…っ」

暁美ほむらが踵を返し、退いた。

…不意に、暁美ほむらの表情が垣間見えた。悔しさで一杯って感じの。

すぐに影に隠れて見えなくなり、そのまま什器の背後へと行ってしまった。

「「はあ……………」」

まどかとさやかが緊張が解けたのか、安堵の溜息を付いた。まあさ

っきの張り詰めた状況と合わさって中々気が抜けなかったしな。

さておき、これでもう二人は安全として…、巴マミに任せて良いだろう。んじゃ、俺は――

「待つて」

『ん？』

… 暁美ほむらの後を追おうとした所、巴マミに呼び止められた。

「追うの？」

『ああ』

「…そう。でも行くほど？」

『気になる事が多々ある』

「折角お茶でも思ったけど」

『丁重に断ろう』

「ふふっ、そう言うと思った」

『生憎今回は先約がいるからな』

「あなたって本当にいけずな人ね」

『そりやどうも』

お茶に誘われたのはこれが初めてではない。何時から誘われはじめたかは生憎覚えてないが、誘いに乗ったら仮面を剥ぎ取られそうでちよつと怖いからだ。

巴マミは信頼はしているが正体を明かす程のでは無い。というより、俺自身の怯えがあるからだ。

『…そっちは任せる』

「二人の安全は保証するわ」

『そうか』

「あ、あの！」

用件が終わりまた追おうとした矢先今度はまどかに呼び止められる。危うくつんのめりそうになったがカッコつけるため、全力で耐える。

『…何だ？』

「あの…、助けてもらって、ありがとうございます」

「あ、あたしも。ありがとうございます」

『…礼はいい』

律儀に頭まで下げて礼を言うまどかとさやか。知り合いだけにちよつと照れ臭い。

「あら照れてるの？」

『照れて無い。断じて』

「あつそ」

い、居心地が悪いのでさつさとその場を後にして曉美ほむらを追う事にする。…後ろから、あ、逃げた等声が聞こえたが反応すると恥ずかしいので聞こえないフリをする事にした。逃げてない、逃げてないからな？！

外に出てみれば、表は太陽が落ちて暗くなっていた。ある程度まだ空の際は赤みが残っているが、すぐに飲まれるだろう。

「…………ふう」

「ご苦労だな」

出た場所は屋上。人がいないのを確認、仮面を外して小休憩。さすがにちよつと疲れた。吹く風がヒンヤリしてて気持ちいい。

「完全に見失ったな」

「スピネルが追跡出来ないとなると、探すのは無理かな…」

この広い見滝原を、特定の個人に夕闇、更に心当たりも無し、スピネルも無理な状態で搜索となつたらまず見付からない。見付けられる自信も気力も無い。

「ああ、帰ろうかな…」

「もう諦めるのか。だらし無い」

「そうは言っけどな…、お前が見付けられない暁美ほむらを俺がどうやって捜すんだよ。…まあ、向こうから来てくれるなら手間も「私に用かしら」おうわっ!？」

突然背後から声を掛けられた。びっくりした! 超びっくりした!! 振り返って見ればその噂した本人が佇んでいるんだから驚くのも無理ないだろ?

「な!?! あ、『暁美ほむら、何処から?!』」

慌てて仮面を付けるが時既に時間切れ、というか意味無いかも…。

「仮面は付けなくていいわ。

“知っている”から」

『な…何だつて?』

「知っていると言ったの。

三峰ミツキ、そしてスピネル」

『!?!?』

「儂の名すら知つとるとはな。貴様、何者だ? 返答次第ではその喉を食い千切るぞ」

ブローチから元の姿に戻り、曉美ほむらを見据えるスピネル。自分の存在を知られているのが気に障ったのか少々語気が荒い。しかし食い千切るって…、何もそこまでせんとも。

「…聞きたい事、あるんでしょ?」

『……「お見通しか。なら質問するぞ」

正体がバレてるのなら付けてる意味も無い、なら外して話を続ける事にする。

「いいのかミツキ」

「あちらさんが真っ向から来てくれたんだし、バレてんなら隠す意味無いしな」

……さて、まず何から聞こうか。ありすぎて困るが何を聞いたらいいかも解らないのも困りものだ。

「じゃあ前提として、お互いに話し合うつて事でいいな？」

「ええ。そのつもりよ」

そのつもりって事は、こつちが”その気”ならこつちも容赦しないと…。なら争うだけ損だ。

「ならまず座らないか？」

「…？」

無表情のまま小首を傾げる曉美ほむら。傾げると言ってもほんちよつと傾げる程度だ。…ちよつと可愛いじゃないかちくしょう。

「…お互い話し合おうつてんだ。立つたままじゃ難だろ？」

まあ受け入れてはくれたようだ。なら無下にしないしこちらも腹割つて話すでしょう。

「ああちよい待ち」

「…？」

「ほいつと…。ほら、これに座れ」

地べたにそのまま座ろうとした曉美ほむらを制止させ、懷からシートを取り出して広げる。大体二人分座れて弁当でも広げられる程度の大きさだ。ついでに膝掛けも出して手渡す。

「…ん？ どうした？」

「…いえ」

「そうか？ はい」

「…ありがとう」

今日はよく感謝される日だな。この氣遣いだって、母と母方の伯母様方、スピネルから当然と教えられた。…あれは厳しい毎日だったな。

「さてと…、お茶請けは何にも無いから勘弁な」

「期待してないわ。出て来たら逆に驚きよ」

「…なんだちゃんと喋れるじゃないか皮肉も言えて学。校での冷たい感じは何だったんだか」

「…他人と話すのが苦手なだけ」

「っはは、さよけで」

一瞬だが世間話なここまでにして本題に入ろうか。でもあと一つやる事がある。

「んじゃあ、暁美ほむら。本題に入る前に一つしたい事がある」

「何かしら」

「自己紹介」

「…」

「学校じゃ話したのは一瞬だけ。そっちはこっちの事をよく知ってるみたいだけどこっちはよく知らない。だからだ」

「…そう」

…一瞬何処か寂しそうな表情をしたような…、てか暗くなってきた表情すら解らなくなりそうだから、スピネルに頼んで明かりを出して貰う。

「とにかく。俺は三峰ミツキ。明かり代わりになってるコイツはスピネル。全身発光してて気持ち悪いだろ」

「気持ち悪いとはなんだミツキ！」

「目と口から光出したままこっち向くな！見た目ネコバ。にしか見

えねえから！つか眩しい！」
「ふん！」

ちよつとスピネルの機嫌を損ねたが気にしない方向で。

「…曉美、ほむら」

「おう。何て呼べばいいか」

「…ほむらでいいわ」

「そつか。じゃあほむら。俺はミツキって呼び捨てでいいや。コイツはスッピ―で結構」

「スッピ―言うな」

スピネルの抗議を無視して、ほむらに右手を差し出す。何のことだか解らないのかまた小首を傾げるほむら。

「改めて、よろしくなつて意味だよ」

「……」

恐る恐る差し出して来た手を取り握手を交わす。

「これで晴れて友達成立だな」

「……」

何か言いたそうだがまずはこれでよい。

さあ長くなったが、質問タイムと行きますか。

o

改めて、よろしくな（後書き）

てな訳で一話に当たる部分がここまでです。

次はサイドストーリー的な何かを挟みつつ次話をだせばいいなという感じです。

TIPS：1（前書き）

【Side Story】

バ MMI に奇襲された時

.

TIPS : 1

— 四年前 —

「動かないで！」

『……………』

「あなたが噂の魔女狩りなのかしら？」

『……………』

「何か言ったらどう？」

『…何の用だ？』

「あなたと話し合いをしに来たってところかしら」

『その話し相手に銃を向けるのか』

「…色々と妙な噂を聞くの。一応用心の為って事で了解してくれるかしら」

『……………』

「ゆっくりこちらに振り向いて。面倒は起こさないでね。」

『はいはい』

「……あら、本当に仮面なんて着けてるのね」

『いつまで銃を向ける気だ？』

「……ごめんなさいね」

『で、話し合いとは？』

「……あなたは敵？味方？」

『お前自身が判断しろ』

「……敵じゃなさそう、ね」

『それでいいのか？』

「何となく、悪い人じゃなさそうってただけけど。話した感じだと
そう思えるわ」

『……さよけ』

「ああ、あなたの名前は？」

『言える訳が無い』

「なら噂の通り、ピエロさんって呼ぶ事にするわね」

『好きにしろ』

「いけずねあなたは。…私は巴マミ」

『いいのか？ バラして』

「あなたが判断しろって言ったのよ？」

『ああ、そうだったな…』

「なら…仲間に、ならない？」

『分かった』

「…っ」

『お前の希望になるべく応える。共同戦線だが、グリーンフィードはくれてやる。』

ただし、魔法少女同士の無意味な小競り合いは止めてくれ。それが条件だ』

「…解った。意外と、あっさり、なのね」

『それが嫌なら無理矢理組み伏せて従わせた方が良かったか？』

「…あなた、本当にいけずね」

.

TIPS : 1 (後書き)

紅茶とか好き？

大好き。午後の紅ティーとか。

……そう。機会があつたら教えてあげるわ。

.

解ってるなら話は早い

現在、昨日あった事を整理中であります。

辺りが段々明るくなってきた。時刻は明け方の四時辺り。

「夜が明けてまいりましたよスピネルさん」

「ああそうだな。して、寝ずに考えた答えは？」

「うん……」

……ほむらが話して、答えてくれた事はあまりにも衝撃的すぎて、頭と気持ちを追っ付かないのが今の状態。

完全に理解しようにも事が事だけに信じる事が難しく、疑いが抜け切らない。しかしそれを裏付ける事実を知っていて、俺とスピネルの目的も知っていると……。

・
・
・

―昨夜のほむらとの会談―

「さて、何から聞いたらいいか」

「答えられる範囲でなら」

差し当たりの無い部分、となると……、まずはあれから質問してみる

とするか。

「まず…。ほむらは何故、まどかを気にかける？」

「……キュウベえ、を知っているかしら」

「キュウベえ？ そういやマミさんの友達とか何とか」

あのまどかが抱えてたぬいぐるみつばいのの名前だったかな。アレがどうしたんだか。…だけどそれと今の質問にどういう関係があるんだ？

「あれが、あなたが消すべき“敵”。延いては魔法少女の、魔法の“元凶”。そしてあなた達の“障害”、“仇”」

「……………」

「ほほう。それは面白い話が聞けそうだな、ミツキよ」

“元凶で仇”ねえ。

…ほんと、何処まで知ってるんだか。この分だと触られたくない部分まで知ってるっばいな。

「キュウベえは、奇跡という甘言で人々と契約し、魔法少女を生み出す」

「ふむ」

「そして魔女を狩らして、グリーンフィードを集めさせる」

グリーンフィード

魔法少女に必要な不可欠な代物であり、魔女が落とす“魔女の卵”。魔法少女が力を行使すると、力の源であるソウルジェムが濁っていつてしまう（これを穢れるとも言つ）。

その穢れをグリーンフシードが取り除ける、浄化するという役割がある。

しかし、ある一定の許容量を超えるとグリーンフシードから魔女が再び復活してしまうので注意がいる。

ソウルジエムが完全に濁りきる前に浄化しなければ大変な事になる……らしい。

らしいと言つには理由がある。
…濁りきる前に皆死ぬからだ。

「…ミツキは何処まで知っているの？」

「何処まで…。ソウルジエムは絶対に手放すなつて事と、浄化はお早めにつてぐらいか…」

「それではあなたは目的を達成出来ない」

…マジかよ。というかソウルジエムについては正直解析出来る状態じゃない。

解析するには、魔法少女の協力、或は奪い取る以外に方法が無い。

「暁美ほむら、それは聞き捨てならんな」

「話は最後まで聞いて」

「……ふん」

するとほむらが左腕に円形の盾を具現させ、中から何かを取り出し、こちらに差し出してきた。

…紙一枚？

「これは？」

「これはあなた達の目的の道標らしいわ」

「らしい、とは何だ」

「……」

「答えぬか曉美ほむら！」

「やめろスピネル」

ほむらから紙を受け取る。四つに折り畳まれていて、やや煤けている。開「見てはダメ」…ええ？

「ダメなのか？」

「ふん。どうせ意味の無い落書か何かであろう」

「スピネル」

「今は見ても理解は出来ない。でも、苦しくなった時は必ず助けになる」

「…ふん。ま、貰っとくさ」

見るなど言われちゃ仕方ない。取り敢えず胸ポケットに入れておくか。

しかしこれになにが書かれているんだか。

「今はあなた達に、ソウルジェムに関する最低限の情報を与えるわ」

「最低限ならいらんわ」

「そのままではあなたは“同じ過ち”を繰り返すハメになる」

同じって…、この先の事を知ってるってのか？…素直に情報を聞くしかない。正直息詰まってた。ソウルジェムを回収出来ず、魔女に喰われて手元には“遺品”しか遺らないんじゃないや進みようが無い。最低限でも情報は喉から手が出る程欲しい。

「ソウルジェムは、魔法少女自身。魂をその中に閉じ込められ、肉

体は単なる器になる」

「…は？」

「魂さえ無事ならば、肉体がどうなろうと魔力でどうとでもなる」

「ちょっと待てよ」

「腕が吹き飛ばうが、血が抜かれようが、ソウルジエムが無事ならいくらでも復活出来る」

「そんなの、魔女と変わらねえじゃねえか…」

「そうよ。契約したその瞬間から人では無くなるの」

「……」

「ソウルジエムが穢れに染まれば、待っているのは自分の死」

何だよそれ…、ソウルジエムは大切なものとは聞いたが、これは何だ？ あんまりじゃないか？ 魔法少女は奇跡を代償に延々と戦い続けなきゃならないとか…。

「魔女は失くならない。魔法少女とキュウベえがいる限り」

「なればキュウベえを消せばよいのか？」

「それではダメ。あなた達が何としても目的を完成させなければ意味は無い」

目的の完成が急務か。
まだ三割も出来上がって無いものを、すぐにでも使用可能な状態まで持っていけというのも過酷な話だ。

「あなたにしか頼めない。魔法少女を救う手立てを持っているのは、あなたしかいない」

「……」
「いくら犠牲が出ても構わない。“ワルプルギスの夜”を倒した後なら、その研究に時間はいくらでも割ける」

「……」

「今までだって、あなたならソウルジェムを取るくらい造作も無いのにやらなかった。必要なら、私がいくらでも取ってくる。だから目的を「ちよつと待て」聞き捨てならない。

犠牲は出ても構わない？ソウルジェムが必要ならいくらでも取ってくるだ？

「——ふざけんな」

「……」

「たしかに俺とスピネルの目的にはソウルジェムが不可欠みたいだな。でもな、そんな死神みたいなマネまでして欲しくはない」

「それが目的の遅れになっているのが理解出来てるの？」

んなもん百も承知だ。

そんな事したら、俺は自分でエフィケイアを叩き割る。外道になるくらいなら、絶望の手前まで諦める訳にはいかない。

「…あなたは、甘すぎる。いつも、いつも…」

「結構さ。聞けば、魔女は消えないとか言ったな？　ならほむら達は死なないようグリーンフシード集めに専念しろ。もしくはこれ以上魔法少女が増えないよう阻止しろ」

かなり無茶苦茶な事を言ってるよな俺…

実のところかなり混乱してる。どうしようもなく頭を抱えたいくらいだ。

形すら固まって無いものを、さつさと使えるようにしろ。物は何とかする、早くしないと魔法少女はいずれ死ぬ。…冗談じゃねえよ全く。

「……………はあ」

「……………」

目的を進めるにはソウルジェムが必要。

それを手に入れるには魔法少女から奪わなくてはならない。しかし奪えば魔法少女は死ぬ。

…敵しすぎるだろ。

「ミツキよ」

「…ん？」

スピネルが話し掛けてくる。

スピネルなら何か良い答えが貰えるか…？

「儂が言った事を忘れたか？」

「……………」

「後戻り出来ぬと」

ちくしょうめ、知恵どころかダメ押しかよ。

「暁美ほむらの言う事に理がある。儂らの目的を一気に進める良い機会だ。」

お主の良心が痛むならこやつに任せればいい」

「ミツキ、お主が後生大事に持つておる“娘の魂”でもいいんだぞ？」

「——ッスピネル！！！」

エフィケイアを展開、剣形態にしてスピネルに全力で振り下ろす——！！

「止めなさいミツキ！」

……スピネルすれすれに寸止め。止められなきゃマジで斬ってたかもな。

「すまぬな。アレについては禁句だったな」

「解ってて言ったのかよ!!」

「ああワザとだ」

「てめえ…ッ!!」

ぶん殴ってやりたかった。

いつもはどんな喧嘩になっても口喧嘩で終結するが、今回はかりは許せない。こればかりはスピネルをぶん殴らないと気が収まらない。

「……ごめんなさい」

「…は？」

突然、ほむらが謝りだした。

何でだよ、そもそも俺がキレかかったのはこの性悪化け猫のせいだ
っていうのに。

「何でほむらが…」

「……」

謝る必要性は…、あるにしろ無いにしろ今謝ることは無い。

ほむらだって本心はどうあれ一つの案を提示してくれたんだ。…内
容は快諾しがたいもんだったが。

「とにかく、スピネルは後で極刑だ。…ほむらはそう暗い顔するな
って」

空気が重い…。まったく、せっかく良…くはなかったが、打ち解け…
たかも解らないがやっと会話出来たのにスピネルせいで台無しだよ。

「……今回はここまでにしとくか。もうまともに話せる空気じゃな

いし」

「…そうね」

「ふん」

ふん、じゃねえよまったく。

誰のせいで…、もういい。一々愚痴るのも億劫になってきた…。

「今日はありがとな、ほむら」

「礼には及ばないわ」

「そうは言っても結構重要な事も教えてくれたし、まどかに固執する理由も何と無く掴めたし」

まだまだ何か情報があるなら、次の機会に聞けばいいか。
幸い、クラスメイトだから困る事は少ないハズだし。

「…家まで送るか？」

「ありがとう。気持ちだけ、受けとっておくわ」

「了解。気をつけてな。また明日、学校で」

「……ええ。おやすみなさい」

「おう。おやすみ」

そう言つて、ほむらは一瞬で何処かへと消えてしまった。

…一瞬吃つたように見えたけど、何か悪い事言ったか俺？

「…とつとと帰るぞ」

スピネルはムスツとした顔で胸元に跳んできてブローチに変わり、何も言わなくなった。不機嫌なのは自分のせいだってのに我が儘なんだから…。

「早くゆけ」

「はいはい解りましたよ」

帰りの途中、買い物をし忘れていた事に気付いて急遽スーパーに駆け込み。勿論変身を解いて、だ。あの格好で入ったら間違いなく奇異の目で見られるに決まってる。

頼まれていたのは嘘じゃない。

ただ、母と一緒に買い物ではなく一人で、だ。
危うく忘れたら恐ろしいや、有難いお説教が待ち受けている。

「危ない危ない、しかも特売やってんじゃない。

今日はご馳走だでや」

「ご馳走？ 何だ、肉オンリーか？！よしならば儂が平らげてやる
う」

勿論だが、スピネルは外で待機中。食物がある場所にペット同伴は
厳禁。

だから念話で会話中。

さっきまで不機嫌で一言も喋らなかったクセに、食い物の事になっ

たら急に話してきやがって全く…。

「それはそれ、これはこれ。と言つ名台詞を知らぬかえミツキ？」

「ああそうですか。」

それと特売やつてるのは玉葱だから」

「おい馬鹿やめんか猫に玉葱など犯罪じゃぞ！」

無視が一番。てかスピネルは猫なのか？

「きゃっ!？」

「おおっと」

突然、何かが足にぶつかった。

今聞こえた声から察するに人だろうが、ぶつかった位置から考えて…子供か？

そして声がして、ぶつかってきた方を振り向いてみたら……女の子だった。尻餅付いてら。

てか転んだのか。やばい、怪我してないだろうか。

「ご、ごめんなさい…」

「ああ、いや、そっちは大丈夫か？ 怪我してないか？」

買物カゴをそこら辺に置いてすぐさま起こしに掛かる。

「はい、だいじょぶです」

「そっか良かった」

「…っ」

どうやら怪我はしていない様子。

「安心だ。と、よしよしとその子の頭を撫でてしまった。

しまったな、不快に思われないだろうか。母が「小さい子を宥めるのに良い」と聞かされ、妹にもよくやってたからつい――？

「ああ、すまんかった」

「い、いえ、あんまりされたことなかったから、ちょっとビックリして……」

……されたことが少ない。

さつき一瞬、額から見えてしまったものが嫌な感じを掻き立てた。

「そっか。…名前は？」

「…ゆま、です」

「ゆま、か」

見た目小学生の娘だが…、それにしては、細い。

自己解釈になってしまいが、このぐらいの子供ならもう少し丸くてもいいぐらいだ。

ただこの娘は違う。

「……」

「…おにいさん？」

「…あ、ああ、いやすまんね」

あまり、意識しないでおく。
触れられたくないだろうし…。

「…んで、ゆまは何買いに来たんだ？」

「…ううん、なにも」

だろうな。見たところ持ち金も無いみたいだし、両親も見当たらないし…。

「よし、ならば何か買ってやろう」

「え！？ で、でも…」

まあそりゃ見ず知らずの奴が買ってやるってんだから戸惑うわな。

…事を見逃して、何かあったら遅い。まずは行動だ。

「子供が遠慮しない。好きなモノ持ってきてきな」

「……はい」

お菓子売場の方面に向けさせ、行ってくるよう促す。

ここは一緒に行くのが正解…のような気がしなくもないが、やることがある。

「……」

お菓子売場に行ったのを確認し、やや後ろに付いて行く。

見えないよう携帯を取り出し、メールで母に連絡をくれるよう手を打つ。

……送信。

ゆまの方を見てみると、安いお菓子を懸命に選んでいた。
安くなかったっていいってのに…。

「……ん」

携帯が震える。母から電話だ。

「はい」

「件の子、近くにいます？」

「いるよ。今お菓子選ばせてる」

内容が内容なだけに母の声に真剣味がある。いつもの陽気な声じゃない。

会話をなるべくゆまに聞こえないよう話す。

親に通報されたのではと誤解されたら全部がおじやんだ。

「推察するに、虐待されてると思う」

「…そう」

母の声が暗くなる。

心を痛めてるのか、怒りを抑えているのかは解らないが。

「場所はどこ？」

「近くのスーパー」

「すぐ行くわ」

そう言い残し母が通話を切った。

…後はゆま次第か。

そつと携帯をポケットに終った。

「決まったか？」

「あ…えつと…」

ゆまに近付き、品定めは済んだか聞いてみるがまだのご様子。しかしある一点を見つめている。

「ん、これか？」

「あ……」

マジカルアートガール

魔法絵描少女・ミルキィリリィ。

という小さい女の子向けアニメ番組のおまけ付きスナック菓子だった。

一つ三百円也。

「ああ、これか」

「あ、だ、ダメですよ」

「いや、いいよ。他に何かあるか？」

「ええっ！？」

そんなに驚かれる理由が……あるか。

「好きか？ ミルキィリリィ」

「……はい、好きです」

ここで大いに語りたいところだが割愛。

今、そんなことはいいんだ

重要な事じゃない。

「何も無いんだったらこっちで勝手に選ぶぞ」

「え？」

とりあえず目に付いたものから三、四個をカゴに放り込む。テキストじゃなく甘くてヘルシーっぽいのと、先程のミルキィリリィを二つ。

「あの、あの…！」

「これはゆまが欲しがった物じゃない」

「…え？」

「ゆまに荷物持ちをさせる駄賃用に買ってるんだ」

屁理屈？いいじゃないか。

こういう屁理屈は好きな部類さ。

えっと。跡は自分用を入れたら食材を見て回るとするかな。

「そのお菓子のお金は誰が出すのかしら？」

「ポケットマネーだけど」

すると、背後から声が。

声の主は勿論母だ。聞き間違えるはずがない。

もう着いたのか！早い！

母がいる方へ頭だけ向ける。

そこには既にゆまを抱き抱えている母がそこにいた。

「可愛いわねえ。ささつとお買い物して皆で帰りましょ」

「夕飯何にすんのさ？後ゆまを連れ去ろうとしない」

「あの…あの…」

母にじゃれつかれて照れて焦ってるゆま。

それを横目に食品を物色…と…、

「材料言つて」

「テキストに見繕いなさあい。ゆまちゃん、今日の夕飯何にしましようか？」

「ええっと…あ、あの…うう…」

テキトーにつて…。全く、本当にテキトーにやるぞ？

テキトーにと言われたからには、お菓子と同じく目に付いたもん…。うん、パスタにしよう。

「今先程、母殿が来たが、何かあったのか？」

「気にすんな。それより、今日は四種類のスパになりそうだ」

すばげてえか…。と露骨に嫌そうな声を上げるスピネル。しかしながらお前は猫まんまだ。

「いただきます」

「頂きます」

「板田・来ます」

「い、いただき…ます？」

「うにゃん（馳走になる）」

「ミツキ、やり直し」

「オウフ…」

力カツと帰宅して、ささっと夕飯の準備、パパッとパスタでお手軽料理。

ミートソースはゆま、ホワイトソースはシア、シーフードは母、キノ

コパスタは俺。

ヒヤアッ！！半分茹でて温めるだけだから手間も半分だぜえ！！

「改めていただきます」

「お兄ちゃんすばらしい手抜きだよ！」

「ははっ、褒めるなよ」

「褒めてません。ゆまちゃん、美味しい？」

「はい、おいしいです…、でも…」

やはり気にかかるわな。

ほとんど誘拐に近いような形でゆまを家に入れ、飯まで食べさせている。

保護した…と言えば聞こえはいいからそういうことにしてくれ。

スーパーを出る前一旦店内を一周、ゆまの両親がいないか確認した。案の定それらしき人物はいなかった。必死にゆまを捜す姿も無し。

ゆまを呼ぶ声もしない。

本当に一人で来たらしい。

「遠慮しないでいっぱい食べていいのよ？」

「……」

「ゆま、口に合わなかったか？」

「い、いいえ！……その…」

「…言ってみな、本音。」

しっかり聞くからさ」

「…はい」

ぽつぽつと本音を話したゆま。

両親は偉い役職にいる事、母親から無視されている事、父親からは虐待を受けている事…。好意が解らず、混乱している事。

こんな小さな娘が話すには辛すぎる内容、そしてついには泣き出してしまった。

「…部屋に行きましょう」

母が自室へとゆまを連れて行った。

「……………」

「……………」

俺もシアも言葉が出ない。

が、俯いていたシアがパツと顔をあげ、何か思い立ったのかごちそうさまと一言言い残し、母とゆまの後を追って行った。

「…後は二人が何とか、と言っても、ゆま次第だけだな」

「自ら産んだ子供を虐げる親なぞ碌な奴では無いな」

内心、今すぐ飛び出してゆまの両親を殴り飛ばしてやりたいが、ゆまが望まない事をしたところで意味が無い。

「…俺達も部屋に戻るぞ」

とにかく、ここに残っていても何がどう変わる訳じゃないから、料理を全て下げて、ラップしておこう。

粗末にしたら、“アイツ”
にどやされるからな。

「…戻るぞ」

「うむ」

何だかんだで待っててくれるスピネル。と言っても猫？の姿じゃどうやってドアを開けられないからな。残るしかあるまい。

「……はあ」

自室に戻り、そのままベッドに倒れ込む。肉体的にも精神的にも疲労が…。

今日は一日色々ありすぎた。

「転校生が来たと思ったら魔法少女で寄り道したら魔女が出て

まどかとさやかか巻き込まれて

ほむらからソウルジェムに関する情報を聞いたけど手に負えるもんじゃなく

拳げ句ゆまの一件…」

怒涛のラッシュで疲労がマッハ。

「さて、状況の整理だ」

「ゆまの件は母さんに任せて大丈夫だろう。…そのうち、我が家が大家族になりそうだけど」

なら一応の解決だとスピネルは言うが…、引っ張って来た俺が手放す一件でも無いが、まだ子供である俺に出来る事は少ない。

「ほれ、暁美ほむらからの情報整理だ。…儂らの目的に関わるからの」

…とにかく、件が動いたら俺も母さんをサポするとして、本題（と言ってはゆまに悪いが…）を考えるとする。

「じゃあ…、“魔法少女とソウルジェム”か」

「うむ。穢れが溜まり、完全に染まりきると死ぬらしく、ソウルジェム自体が命となっておる」

「魂さえ無事なら肉体はいくらでも修復可能と…」

魔法少女は、死ぬまで魔女と戦い続けなければならないと、“アイツ”とスピネルに教わった。

今まで、何故死ぬまで？と疑問があつたが、ほむらの助言とこれまでの経験から全部合点がいく。

ソウルジェムの穢れを取り払えるのはグリーンフィードのみ。穢れは魔法を行使しても、何もせずとも溜まり、定期的に取り払う必要がある。

「なら上手く立ち回って、効率よくグリーンフィードを集めないと自滅してしまう、か。魔法少女は大変だ」

「それは本心か？」

「まさか…」

考えれば考える程答えが望まない方向に向いていく。一步間違えれば完璧詰み状態。

ほむらやマミさんが敵に回る。

「お主自身が解っているなら話は早いだろう。奪つか殺すかの違いだけだ」

「……………」

「儂らは、魔女という獅子から魔法少女という死体を横取りするハイエナ、禿鷲と同格、いやそれ以下か」

「…いい加減自分達を蔑むの止めにしないか」

「ならなんだ。儂らは聖人君子か？」

毎度の事だが、スピネルの物言いは何とかならんのだろうか。苛々してしょうがない。

「……これじゃ寝ねえ」

「強制的に眠りへ誘おうか？」

「結構です」

物理的な安眠はマジ勘弁。

考えすぎて眠れないのは、今に始まった事じゃない。始めの頃はよくそういう状態に陥ったっけな。

いきなり人外相手に命のやり取り、生身とはいえマジな人間とも殺し合い…。もうマトモな人生じゃない。

「……後悔しているか？」

「してない」

「…ふん」

結局、中々寝付けず、眠れたのは起床しなきゃならない二時間前…、午前五時くらいだったか。

しかもシアが起こしに来た時、酷い顔と言われた。考え事しながら眠るもんじゃないと改めて思った…。

気持ちだけで充分だ【前】（前書き）

2011/7・15に投稿。

やっとこさ続きです。

二話のAパート辺りになります。

こんだけ投稿遅れといて前編とかちょっとアレですよ。

気持ちだけで充分だ【前】

「……景色が霞んで見える」

「自業自と……くああ……」

「欠伸すん……ふああ……。眠い」

やばい。これはやばい。

一限と二限は移動教室じゃないから爆睡決定だな。
眠くて堪らん……。

「……その眠気を押してまで家を出た理由は？」

現在、学校から正反対の方向に向けて進行中……。しかも準備もそこそこに家を出たのには、スピネルも言った通り理由がある。

「……曉美ほむらとの接触」

「お主も物好きよな」

正直こつちに来てるのは勘でしかない。だってほむらの家の場所が解らないし、聞き損ねた上に外したら遅刻決定。

「リスクを冒してまで会う必要が？」

「ある」

……ここら辺で待機かな。

時間は六時半をやや過ぎた辺り。向こうにダッシュで着く時間を考えたらここらが限度か。

調度良くベンチを発見。

体力を無駄遣いしないためにも座って寛ぎながら待ち伏せる。…ス
トーカーか、と。

「理由としては、仲を取り持つ事。次に連携を取れるかの確認、つ
てどこか」

仲を取り持つ。

まどか、さやか、マミさんの印象が最悪な状態でどうするかと言われれば、“事情を知らない”俺が間を取るしかない。

万が一、まどか達が俺の知らない場所で魔女…、或は魔法少女が来た場合にも何かしら対処しやすい。

「魔女を相手にするより厄介だぞ？ どうする算段だ？」

機転、機転を何とか利かせるしかない。ほむらとさやかを抑え、まどかとマミさんを味方に付けて……

ああ、作戦練るとかいつ以来か。軽く目を閉じて思考を巡らす。

「……妹殿に頼めばいいのでは」

・
・
・
・
・
・
!

「その手があつたか!」

「っ!」

「うおっ！ほむら！いつの間に！」

あまりの灯台下暗しに度肝を抜かれたと思ったたら目の前に噂の暁美ほむらがいつの間にか居た。
そこにいなかったのにいたと言うか驚きが鬼になる。

「…何をしてるの」

「あなたを待っていたのです」

「…？」

時間を確認、大体七時を過ぎたぐらい。

予想が的中して暁美ほむらに出くわす？事に成功。先ずは上々。

「理由は歩きながら説明しよう」「……」

取り敢えず立ち上がって歩くよう促す。訝しみながらもちゃんとついて来る辺り律儀だな。

「…ストーカーの趣味でもあったの？」

「怪しんでるのは解るけどもう少しソフトな言い方を求める」

「…待ち伏せしていた理由は？」

「んー、まあ大分ソフトにはなったか。

んで、簡潔に言うなれば、親睦を図りましょう」

「する必要は無いわ」

「まあ話を聞きなさいな」

「……下らない事なら話すだけ無駄よ」

歩調をやや早め先に行ってしまうほむらを何とか宥めて話をする。
とにかく、つじつま合わせが必要だという事と、関係修復とは言い難いがまどか達との話し合い。まどかだけを守るにしても、その周

困と守りたい本人が、ボディーガードを嫌悪しては

危ないから魔法少女になるな↓あんななんか信じられるか！↓魔法少女になっちゃった

とか逆効果にも程がある。

「理由が話せないにしろ、親しくなって、誠心誠意話せば何とかなるって。」

それを話す本人が相手を信じないんじゃ、嘘を言ってるのと同じだろ？」

「……言ったところで、誰も信じない」

「なら俺が信じる」

「っ……！？」

何に驚いたのか、突然歩みを止めるほむら。急に止まるなよ。こっちはフラフラなんだぜ？

「誰もほむらの事を信じないってんなら俺がほむらを信じる。昨日、俺達…俺とスピネルにしか出来ない事のヒントを教えてくれたよな」

「それも嘘かもしれないじゃない……」

「少なくともあの時話してくれたお前の目に嘘はないように見えたけどな」

あの時だって、俺達に嘘を付く利点は無い。しかも、研究に必要なら取ってきてやるとまで言った。

そんな事を言い出すんだ。ほむらが少しでも信じてくれてるなら、俺も信じる。

……これがスピネルに甘ちゃんとか言われる原因なのかな。

「…っ」

何処か苦しげな表情を浮かべたほむら。余程、今までが今までだったんだろうか…。

“何と無くだけど”解らなくもないような。

何かこう…、今思った何と無くが引つ掛かる。

しかしながら考えたところで埒が明かないので捨て置こう。

「ソウルジエムの事はさ…、まあその…、何とかするさ」

「…あなたの何とかする、は信用できかねるわ」

「ぐっ…。こ、言葉が信用されずとも、信頼を勝ち取る事は出来る！だから期待して待ってる！」

「…期待しないで待っておくわ」

「なっ、ちょ、おいほむら！」

今度は急に歩き始めたと思ったらスタスタ先に行きやがった。慌てて後を追いつける。

「遅れるのは嫌だから」

「立ち止まったのはお前からでしょうがよ」

「…そうね」

…あ、今ほむらちょっと笑ったか？

横顔だけ、微妙だったけどちょっと笑ったよな？

「…笑ったか？」

「笑ってない」

「笑っただろ」

「笑ってない」

「……。ほむらさんほむらさん」

「何か用？」

「笑いましたか？」

「笑ってない」

「そうですかありがとうございます笑顔可愛らしいですね」

「……っ！」

「っであっ！？」

こ、こいつ、右脚の上段回し蹴りとか、後頭部に向かって振り切ったぞ！？フォームが決まってるから首を刈りとうとしたな！？超痛い！！

「……ふん」

機嫌を損ねてずんずんと先へ行ってしまうわゆるほむらさん。……おう、眠気も押して授業ではよく寝れそうだ。

「ほ、ほむらさん……周りに生徒がいなかったらそれは、は、反則……危険行為……」

「自業自得よ」

「んだよ……」

言い返してからかうのも選択にあるが、今度こそ意識を刈られるかもしれないのですぐに自重。ああ、首痛え……。ちらりと懐の携帯で時刻確認。……七時半前、充分間に合うな。思ったより掛からなかったみたいだし。

「そっぴや、ほむらの家って学校から遠いのか？」

「……それ程遠くはないわ。歩いて約二十分程度」
「なるほど」

と言うことは意外と近所か？ いや、なら同じ道すがら出会う…、場所に因りけりだから考えるだけ無駄だなこりゃ。

…と、そうだ。まどか達に会う前にやっておかなきゃならん事が。

「ほむら、口裏合わせしよう」

「…さっきの件で？」

「そう。俺が色々出来事をでっちあげるから、テキトーに相槌なり切り捨てるなりすればいいさ」

「丸投げしないでもらえる？」

投げたつもりはないんだがなあ。

とにかく、切り出しは“昨日の買い物中に出くわした”という事に。

「…それだけ？」

「これだけ。後は流れに身を任せ同化する」

「…そういえば、あなたはいつもそんな風だったわね」

ほむらがやや呆れたような、溜息混じりの事を言う。…いつも、が気になったが深く聴かない事にした。どうせ答えてくれそうにないからな。

「…お、噂をすれば何とやら」

「っ…」

「そう身構えるなって」

話をしてたら学校に到着。

そして校門近くで、まどか、さやか、仁美、シアを発見。全員不思議そうな、驚いたような目をしていた。

「お兄ちゃん…と…噂の転校生さん、ですか？」

「え、ええ…」

「うちの妹。シアだ」

「はじめまして。妹の三峰　シアです」

「暁美、ほむら…」

やっぱ警戒、身構えてガチガチだ。

シアとは初対面、かな？

「……あの、暁美さん、兄が何か失礼な事を言いましたか？」

「っ！？」

「まあそりゃ驚くわな。てか何か言っただつもりは無いんだが？」

「えゝホントに？」

シアがそれこそ嘘だな、というようなイジワルっぽい表情を向けてくる。

オニイサンウソツカナイ。

「…お兄ちゃんお兄ちゃん」

「何か用かな？」

「暁美さんに何か言いました？」

「言っていない」

「そうですか殺し文句凄いですね」

「俺がどうやって殺し文句を言ったって証拠だよ」

「トリックだよお兄ちゃん」

このやり取りまさに兄妹。

流石だよな俺達。

因みにまどか達、まどかは苦笑、さやかはまたかと呆れ、仁美はあらあらと困り顔。ほむらは無表情だ。

まどか達は大概見慣れてるし、別段気にしてないだろう。

ほむらは何かしらリアクションが欲しいな…。

「漫才しているところ悪いのだけど」

このままほむらが笑うまで不思議言語の応酬をしようかと思ったところに、ほむらが待ったを掛けた。あと漫才じゃなく言葉のドッジボールと読んでもらおうか。

「…時間」

「ん？ ……あっ」

ほむらが指差す先を見ると、学校の時計。

……七時四十六分？

因みにまだ校門すら通っていない。

「先に行くわ」

「ああ。……じゃねえ！やべえ！？ 待てほむら！遅刻するときは道連れだー！！」

「あ、ちょ、ミツキ！」

「まどかさんも仁美さんも急ぎましょ！」

「う、うん」

「お話はまたあとで、ですわね」

なんてこった。遅刻しちゃうじゃないか！ 誰のせいだ！

全員で昇降口に向けて一気にダッシュ。先頭からほむら、俺、さやか、シアにまどかと仁美が手を引かれて走っている状態。

まあ…、小走りで十分間に合うんだが、俺が走ったらほむらが走りだして速度上げたからつい全速力。

結局、昇降口一番乗りはほむら。二番目にシアとまどかと仁美。

…俺とさやか？

無駄に罵りあって、体力消耗したうえに俺寝不足だった…。

「…あの二人は自滅ね」

「はあ…はあ…。晁美さんって、足速いんですね…」

「ほ、ほむらちゃんね、はあ…、学校で一番速い、んだよ…はあ…」

「ま、まどかさん、大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫大丈夫…。いきなり皆全力なんだもん、ビックリしちゃったよ…はあ…仁美ちゃんも凄いね。あんまり息切らしてないし…」

「ですけど、結構いっぱいだったのよ？」

「えええ…」

……この後、先に校舎に着いたまどか達は俺とさやかに一言先に行くと告げて校舎の奥へと消えて行った…。

「もう…限界だ…」

「寝るな、寝るんじゃないミツキ！寝たら死ぬぞ！内申的な意味で

「！」

―走っている最中の会話―

「待てミツキと転校生ー！一番乗りはあたしんだー！」

「馬あ鹿め！ラディカルな速さを持つ俺が一番乗りだぜ！」

「…奥歯でも噛めばいいのかしら」

「「な、何だとっ！？」」

「皆さん、おはようございます。……あら、三峰君がいないみたいですが？」

「せんせー。三峰なら保健室でくたばってまーす」

「くた…え？」

「重度の寝不足らしいです」

「は、はあ…」

「とつとと起きなさい」

「——うおっ!？」

突然下から突き上げる衝撃が背中を襲う。しかも驚いた拍子に転げ落ちてしまった。

「うう…、な、何だ…？」

「いつまで寝てるつもり？」

「ほ、ほむらちゃん…」

「おお、やるなあ転校生」

霞む目とハッキリしない頭で俺を叩き落とした犯人を見る。……腕組みしたほむらと、あたふたしてるまどかと、感心しているさやかだった。

「さっきのはほむらか？」

「…いいえ、美樹さやかが犯人よ」

「うおおい!？」

「何だつて!？それは本当かい!？」

「冗談よ。それより、もう昼休み前なのだけど」

へえ、ほむらが冗談言つたよ。…つと、保健室にある時計を見たら、確かに四限が終わる時間だ。何だ起こしに来たのか。

「ミツキ君、大丈夫？」

「ああ、まあ何とか」

ベッドからの落下ダメージで若干痛むが気にする程じゃない。まだかに手を貸されながらノロノロと立ち上がる。

…しかし不思議な光景を見ているな。

ほむらの隣にさやか。

あん時はかなり敵視してたのに、今は…

「転校生、よくもあたしのせいにしたわね」

「蹴り起こせと提案したのは貴女よ」

「たしかにそりゃそうだけど」

「私は貴女の命令で嫌々やつただけよ」

「んだとお!？」

あの二人が普通にじゃれあっている光景。

「お前ら、何かあったのか？ やけに仲良くなってるな」

ほむらもさやかも互いにいがみ合う…て程ではないけど、嫌いあつてなかつたつけ？

一体何があつたのか…。

「ん？ まあ、話してみたら案外…。それに、色々まどかの事、心配してくれてるみたいだし…」

随分歯切れが悪いな。

まあ詳しく話せないのは、おそらく昨日の出来事。

転校生は魔法少女で、あたし達の事を助けてくれたんだ

とかまかり間違つても言えないよな。一般人に言つたらとても可哀相な目で見られてしまつだろうさ。

しかしそこは俺。

ちゃんと話してくれるなら…実際その場面見てるし…こちらも誠心誠意応えよう。

「……………」

ほむらはだんまり。

まあ堂々と話す訳にはイカンし、そうなれば俺の正体もバレかねない。

…シアじゃないが、表情かおを見るとどこと無く戸惑いと嬉しさがあるように見える。

「ふん。まあまずは友達になるには話し合う事が重要だからな。お前らがギスギスしないで良かったよ。なあまどか？」

「うん。ホント良かったよ」

まどかもほむらの本心を（どこまで話したかは分からないが…）聞けて良かったんじゃないか？ 嬉しそうな顔してるし、これなら蟠りも徐々に除けるだろう。

「それとして、ミツキ」

「ん？」

「朝早くから私を待ち伏せしてた目的を忘れたの？」

「……忘れてないっすよ？」

やべ、今思い出した。

「待ち伏せだあ？ ちょっとミツキ、あんたあたしら美少女達との素晴らしい朝の登校を蹴って転校生んどこ行つてたんかい浮気者めッ！！」

「浮気者じゃねえ！ちゃんと理由があるんだっつもの！ あと自分で美少女言っつな！」

さやかが食い付いてきた。いや何で浮気者扱いされにやなんのだ。

「あたしらの事は遊びだったのね！？ まどかや仁美までたぶらかして！ まどかはまだ小さいのよ！？」

「…さやかちゃんそれ嫌味？」

わざわざ目薬まで注して、まどかまで巻き込んで三文芝居かい。

「…このまま三文芝居を続けさせる気は無いから簡潔に言っわ」

「三文芝居っていうな」

「昼食に誘われたのよ。…熱烈な行為でね」

ちよっと待て熱烈な行為って何だそんな事した覚えないぞ！？

「と、とにかく！ミツキ君は皆でお昼食べようって誘ったんだよね？　だったら、企画した本人が寝過ごしちゃダメだよ？ね？」

俺がほむらに突っ掛かりそうになったのをまどかが止める。ふっ、危うくほむらの挑発に乗るところだったぜ…。

「…まあ確かに、ほむらを誘ったのは俺だしな」

お膳立てはしたから後は好き勝手どうぞってのは無責任過ぎるわな…とりあえず軽くノビをしてリフレッシュ。時計を見ればすぐにでも昼休みを告げるチャイムが鳴る時間。

「んじゃあ…お？」

皆を連れて教室に戻ろうかと思った矢先、ズボンのポケットが震えた。

何が？って携帯なんだが…、誰からだ？　因みに俺のはiPhoneな。色々便利だからな。

「……」

「ん、誰からよ？　画面ジッと見てさ」

「ああ……」

さやかとの問い掛けにも返事そこそこに、ディスプレイを操作する…。相手は…。

「ちょっと」

「…すまん。ちょい用事が出来た」

「え？」

「大丈夫、すぐに合流すつから。場所は屋上、仁美にもよろしくな
さやか、先導ヨロシク」

「え、ああ、うん…」

手早くポケットに戻し、差出人に指定された所へ急ぐ。…呼び出されるのも珍しいな。

指定された場所は、三年の教室。取りに来いとの事だけど、新しい紅茶葉でも手に入ってたのかな？

小走りで保健室から出るとバツタリ保健の先生と遭遇。あわや注意されるかと思つたが、軽く「次は無いぞ」と注意された程度で済み、謝罪の意味も込めてサーセンと返した。

—
—
—
—

向かっている途中で昼休みを告げるチャイムが鳴った。階段を一段飛ばして駆け上がる。

いやあゆっくり寝たから全快だぜ。

「つと、ほつ。…到着つと」

俺を呼び出した本人を捜す。

案外あの人は目立つ。

美人だし気品があるし、隠れファンが結構いるみたいだし。

ファンクラブが存在してるのは確認済み。昔…という程じゃないが、あの人と話していると時々妙な視線を感じたから、調べてみたら案の定…と。

「ミツキ君」

「あ、どうも」

で、その噂の美人は…

「倒れたって聞いたけど、もう大丈夫なのかしら？」

「平気ですよ。単なる寝不足でしたし」

“巴マミ”さんだ。

故あって前から色々世話になっている。いつ出会ったかは長くなるから割愛。手助けしてもらったりとか、オススメのケーキ屋や紅茶の入れ方を習ったり……

魔女を倒す仲間だったりと。

「ならいいけど、あんまり夜更かししちゃダメよ？ ……と言っても、右から左かしら」

「そんな事はないっすよ？」

マミさんは俺が巷（魔法少女界隈）で有名なピエロだったのを知らない。だから俺も知らないフリをする。

「まあそれはそうとして、来てもらったのは…この前欲しいって言ってたお茶葉が手に入ったのよ。はい、これ」

手渡されたのは紙袋。表には銘柄が印刷されている。

頼んだ、というか試しに入れてみたいってマミさんに話したやつをわざわざ取り寄せてくれたらしい。

「いいんですか？ 高かったんじゃない？」

「あの娘が持ってたの」

「……………」

ああ…、これ“あいつ”のだったのか。

「あなたが持つてなさい」

「…はい。でもよく見つけましたねこれ」

「整理していたら出て来たの。…以心伝心なのかしら？」

「…かも知れませんがね」

「あら、惚気？」

「べっつに」

惚気、か…。

あいつの四十七の技のひとつか言ってたな。

…あんま感傷に浸ると嫌だから軽く目を閉じ小さく深呼吸。

「とにかく、ありがとうございます。大事に使いますよ」

「必ず使い切るのよ」

「解ってますって」

言われずとも、必ず。

「…じゃあ、この辺で」

「ええ。また何かあったら連絡するわね」

一応、モノを受けとったので用件はここまでだ。

…ああそうだ、マミさんも輪に入れてみるか。あの調子だったらおそらく上手く行くんじゃないか？ 間にまどかとさやかも入る理だし…、まあなんにせよ誘ってみるか。

「あ、マ「巴さん」…つとと」

声を掛けようかと思った矢先、他の人にお呼ばれてしまった。惜しい。

「あら？ はい、何かしら？」

「ああ、ごめんね。さっき、先生が……」

マミさんと呼んだ生徒が軽くこちらを見ると、小さい声でマミさんと話し出した。

おかげで何を話しているかは不明。

…広報の回し者か何かと思われたか？ いや邪推か。

「…え？ うゝん、解ったわ。すぐに行くから、待っててもらえるよう伝言頼めるかしら」

「了解、それじゃあまたあとで」

…どうやら用事が出来たようだ。これは仕方ないから誘うのはまた今度だな。

「ごめんなさい、ちょっと用事が出来ちゃったみたいなの。さっき何か言いかけたみたいけど…」

「あ、いや、大丈夫ですよ。またの機会にしますから」

「そう？ ならいいのだけれど」

「大丈夫ですって。俺も行きますんで」

「ええ。じゃあまた今度」
「はい。また今度」

また今度つてのは、まあ、また会いましょうみたいな言い回しだから。

さて、時間は… っと。

「…五分で戻るという制限を過ぎてしまいましたとさ」

またさやかが突っついてくるだろうからカウンターの準備してパパッと弁当持って力カツと屋上に行こう。

ああっと、もらったコレはバッグに入れておこう。

（なんてさやかに返すか。普通なら着かない時間で…とか？）

んな事を考えて自分の教室に向かっていたら携帯が震えた。…メール、さやかからか。

差出人「美樹さやか」
件名「時既に時間切れ」

約束の五分で戻るを過ぎたから
お前の大事な大事な妹と弁当は預かった！
返してほしくば
とつと来るのだ！

- END -

「なんだこの頭の悪い文章は」

ついでに写真も付いていた。

左に泣き真似をしたシア

右に苦笑いを浮かべてるまどか

差出人は真ん中で弁当片手にドヤ顔でまどかとシアを抱き寄せている。

後ろにほむらと仁美も写り込んでいて呆れ顔のやれやれと言った表情。

「あれ俺の弁当じゃねえか…」

これは急がなければならなくなったな。前にも同じような事されて（前は弁当だけだった）、中身食われた事があった。しかもカウントダウンに写真付きで、徐々に食われていく様を見せ付けられる形で。

さすがにシアとまどかが止めてくれる…と信じたいが…、前科持ちがやってるのが一番危険であって……

「…つまりは全速力ッ！」

加速装置よろしく全力で屋上へ向かう事を決めた。

茶葉は後でどうとでもなる。

何とか手を出される前に、さやか of 魔の手から弁当とシアを救出せねばなるまいて！

道行く生徒達を摺り抜け、この時ばかりはとエフィケイアからちよ
いと魔力を身体に流して階段七段跳ばし！
幸い二回昇りきるだけだったから良かった！

「見えたっ！」

屋上への扉あつー！

瞬間的に開け放つてまどか達の位置を確認！

ああっ、さやかの奴弁当の包みを外してやがる！

「その弁当、ちょっと待ったあーーッ！」

「むっ！？」

さやかがこちらに気付いた。

初速トップスピードでまどか達のグループ目掛けて超スピードスラ
イディングで滑り込むー！（気分と雰囲気です）

「おおーッー！」

「ヤバいー！ 奴を止めるお！転校生えッー！」

「お断り」

「何だとっ！？」

「お兄ちゃんストップストップ！」

結論。

蹴っ躓いて前のめりに倒れて転びました。

「…………痛い」

「…馬鹿ね」

その後、起き上がったと思ったら半分涙目になってたのでさすがにいたたまれなくなり、オロオロしつつ俺の手を引き、輪の中に座らせたと…。

「泣いてないっす」

「お、お兄ちゃん、大丈夫？」

「泣いてないっす…」

「あゝ、あたしもからかい過ぎたわ。ご、ごめん…」

「自分が格好悪過ぎて恥ずかしいっす」

勇んでカッコつけて飛び込もうとした結果がこれだよ！

「…いい恥晒しね」

「おおおおお……………！！」

「こ、こら転校生！追い打ちすんな！黙っと言ってやりなって！」

「余計傷付くわっ…！」

くそっ、俺の精神ダメージも異常だが、その分ほむらがまどか達と打ち解けあえるならプライマイゼロ…になればいい、訳ねえだろちきしょう…！

「えゝ、ミツキの恥ずかしい登場もありましたが「うっさい！」…
はいはい。それはこれとして…」

色々ゴタゴタしたが（主に魔法少女関係で）、一応これで俺の第一目的は達成した事になるか。

さやか之音頭でそれぞれ持ち寄った飲み物を手に取る。

「転校生、曉美ほむらの歓迎会を始めます！かんぱ〜いっ！！」

「「「「かんぱ〜い！」「」「」」

「……」

お、ほむらが照れてる。

また珍しいものが見れた。

「さあ飲め！曉美ほむら！今日はあんたが主役だ！」

「改めてよろしくね、ほむらちゃん」

「あ、ありがとう……」

まどかには素直に感謝の言葉言ってるのにさやかに対してはどこと無くうざったいような、微妙な顔してるなほむらの奴。

仁美ともなかなか打ち解けてるみたいだし、シアとはすぐに仲良くなったみたいだな。

まあ、シアにかかれれば誰でもイチコロだけど（好意的な意味で）

「…あ、そうだ。ミツキ」

「ん、何だ？」

さやかが改まったような感じで話し掛けてきた。

「その…、変な話なんだけどさ……」

本日二度目の歯切れが悪いさやか。

大方予想としては、昨日の事が何か…、はたまたつてどこか。

「どうした、勿体振って」

「いや、勿体振ってるわけじゃないんだけどさ…」

さやかがチラツとまどかの方を見た。

まどかも小さくだが頷いた。

「その…。もし、もしもだよ？」

何でも一つだけ願いが叶うとしたら、あんたならどうしたい？」

…あの後、マミさんに何を聞いたかは知らないが、まあ幾分直球で来たな。

その問い掛けにはむらも反応する。ここで俺が変な言い方をすればどうなるか…みたいな視線を感じる。

「…どういうこった？」

「え？ あ、いや、その…。」

た、例えばの話よ！例えばの！」

どう答えるかな…。

下手に希望を与える言い方をすればむらの望まない方に進んじまう。

かと言って、露骨に否定した事を言えば勘繰られてこっちも怪しまれかねない。

「うーん…。さやか自身はどう思うんだ？」

「え、あたし？」

聞けばさやか自身は、よくわからず、やりたいこと何かいくらでも… と思ったが

「いざってなると迷うもんでさ」

「いざ？」

「ああ、うつん違う違う！

だから～え～つと…」

「ん～まあとりあえずな…」

いい加減ほむらが我慢出来なさそうだから取り敢えず何とかしよう。気付かれないようほむらを見れば、若干だが眉間にシワが…。

「それはさ、絶対叶えなきゃならないもんなのか？」

「…いや、それ程、なのかな」

「何か叶えたらリスクか何か付くのか？ 付かないんだったら大いに悩め。付くんだったらリスクの方を考えた方がいい」

「うつん…」

さやかがつんうん唸り始める。

あんま難しく考えると少ない頭がオーバーヒートするぞ？

「幸せ馬鹿なのかな… あたし」

「ああ馬鹿だね」

「そつ… って、はあ！？」

「そうね」

「ほむらまで！？ 何なのよ～！？ だって、あたし…、ああもうハッキリ言っわよ～！！」

癪癪起こしたのかさやかが一大決心でもしたかのように身を乗り出

してきた。顔が近い近い。

ほむらが警戒を強める。

俺である三峰ミツキは魔法少女の事は知らない。…まさかここで暴露すんのか？

「うぐぐ……」

つ、つまり、夢で何でも一つ願いを叶えるけど悪い奴らと命懸けて戦えっという夢を見たの！それがリアルだったからあんに聞いたのそういう事なの解った！？」

……そうきたか。

とにかく落ち着け。顔真っ赤にしてまで言う程のもんじゃないだろ。

「ぜえ…ぜえ…」

「わ、解ったから少し落ち着け。何か飲んで一旦落ち着け」

「ああ、うん、ゴメン…」

そう言っただけ落ち着いたみたいだ。…近くにあった午後ティーを手に取り飲んで。

「——つぶはあ…ってコレあんたが飲んだ午後ティーじゃんかあ！？」

「ちょ！？お前が勝手に飲んだんだろが！！お、俺の午後ティーがぁ…！！」

一気に場がカオスになってきた。

さやかの馬鹿たれが！

お前もあわあわしてんじゃねえって！！

まどかもシアも止めるか何かしろっての！一緒にあってあわあわし

てんな！

あと仁美は顔赤らめてぼくっしてんじゃねえ！

ほむら…駄目だ！我関せずって顔してそっば向いてやがるし！
ちくしょう、強引にでも纏めてやる！

「ととととにかく！ 何にしてみリスクが高い！命懸けてまで叶える願いかどうか、叶えた自分への見返りがなさすぎる！」

「さ、さいですか…」

「夢であっても、お前が命懸ける意味が薄い！

願いを叶えるだ何だって言っても、結局返ってくる見返りが無いに等しい！」

段々本音らしきものが漏れてきてる気がするが、照れやら何やら訳の解らないものに乗っけて勢いだけで乗り切れ！

「万が一、んなファンタジックな事があつたら、まどかや仁美やシアを引き連れてぶん殴つてでも止めるからな！」

殆どほむらからの忠告を流用してるもんだが、今俺が答えられる精一杯だ。

「……………」

「……………」

だ、黙るなよ！すんげえ恥ずかしいじゃねえか！

「…ミツキ君、それって美樹さんが危なくなったら助けに行くつていう、告白ですよ？」

「な！？違つ、告白じゃねえ！」

仁美は何言ってた！

この場にこれ以上混乱を招くな！さやかなんか顔真つ赤にして譫言ぶつぶつ言ってたぞ？！

まどか、そっちは任せた！

「お兄ちゃん、まどかさんや仁美さん、ほむらさんが同じような事になっても助けに行くの？」

「え？ まあそうだな…」

「お兄ちゃん三股も四股も掛けちゃうんですかー！？やだー！！」
「話をややこしくすんな！」

シアも煽るな！

その顔は絶対「これ煽ったらもつと面白くなるな？」みたいな事思ってたんだろ？！

ああもうカオス、カオスだ！

一体何がどうしてこうなった！

…結局、さやかの問題がうやむやになってしてしまい、あのカオスな状態がしばらく続いたのは余談である。

飯食う時間がギリギリになってしまい急いで片付けたんだったか。

—— すっ飛ばして放課後。

午後の授業で散々っぱら弄りネタにされた俺とさやかは机に突っ伏していた。

「…疲れた」

「あんたのせいでしょ…」

「俺のせいだよ…」

「あはは…。二人ともお疲れ様」

まどかが劳いの言葉をくれる。
流石我らの癒し系だ。

「はあ…。今日は早めに帰って横になるか…」

「…っと、あたしとまどかは用事あるんだった」

「そうか、ならシア拾って帰るかな。仁美とほむらはどうするよ?」

調度ほむらも帰り支度が終わりこちらに合流。

仁美はまた稽古があるらしく、先に帰るとの事。

「では、お先に」

「おう。また明日な」

仁美を見送り、残ったのは

俺、まどか、さやか、ほむら。

…そうだ、ほむらにアレ教えてなかったな。帰りに教えておくか。

「ミツキ」

「ん?」

「少し、寄り道したいのだけれど」

ほむらが寄り道をしたいと言ってきた。またまた珍しい……いや、何かあるって目してるな。

「分かった。お付き合いしましょう」

「助かるわ」

「まどかとさやかの用事ってのは？」

「人と会う約束してんだわ」

なら詮索の必要は無いか。

他愛もない会話をしつつ教室を後にし、下駄箱で外履きに履き代え、校門まで来た。ここからは互いに別行動になる。……余談だが途中でほむらに昼の力オスをまた弄られた。恥ずかしい。

「また明日な」

「ほんじゃね。あ、ミツキ、二人きりだからってほむらに手え出すなよ？」

「うっさいわ！」

「またね。ミツキ君、ほむらちゃん」

「ええ。また」

帰り際にさやかと二、三軽くけなしあい解散となった。

まどかとさやかは待ち合わせの為よく行くあの喫茶に。

俺とほむらは”寄り道”の為逆方向に。これであいつらと鉢合わせする事はなくなる。

幾分歩いた先、人気の少ない公園にたどり着いた。ここまで一切会

話無し。

「…んで？　ここまで俺を引っ張って来た理由は？」

お互いテキトーな場所に腰掛け、今回のほむらの目的について話す事にした。

「あなた達独自の念話の事」
「成る程」

これは手間が省けた。
いつ教えるかと思っただが、調度良かった。
教えようと思ったのは、俺とスピネルとの“念話の回線”。

簡単な話、電話番号を教えるってな事。

「なら…」

俺は懷からネタ帳を取り出し、一枚紙を切り離して、ペンで簡単に星を描く。

「ほい」

「ありがとう」

ん？　やり方の説明してないんだが…。

「これで大丈夫かしら」

頭の中にほむらの声が響く。

…驚いた、一発だ。

やり方は図形でも何でもいいので、キーワード…パスになる図形を一つ決める。

それを頭に思い浮かべつつ発信する。これでOKなんだが、まさか知ってるとは…。

「今回は星なのね」

「今回？」

「おい、ミツキ」

お、中継役のスピネルが入ってきたな。怒られっかなこれは。

「何故曉美ほむらがこの回線を使っておる」

「俺が教えた」

スピネルがご立腹だ。

まあそりゃあ俺とスピネル専用の回線だからな。

いきなりほむらが介入してきたら驚くのも無理ない。

…他に知ってるとしたらあいつくらいだろうな。

「使わせてもらっわ」

「…ふん。勝手にしろ」

スピネルが反論しないとは、今日は珍しい事が多い日だ。

それからしばらく念話で話す、もとい、今日の活動報告をした。ぶっちゃけ雑談になるが。

それで俺が保健室に運び込まれてた後、ほむら自身がまどか達に勇気を出して目的を話した事を知った。

魔法少女になるのはあまりにも危険過ぎるとか、キュウベえの願いに対する対価の危険性とかも話したらしい。

穴だらけな説明でも、誠心誠意（かどろかは解らんが）話したら一応の納得と理解は得たようだ。

だからあの時ちよっと仲良くなったんだな。

「まあとにかく、これでほむらは正式な仲間だ」

「甘ちゃんが…」

それは俺の固有スキルだからしょうがない。

「ミツキ、あなたを呼んだのはこれだけが目的じゃない」

「ほづ。なら本当の目的は？」

するとほむらが、明後日の方向に向くと少し表情が険しくなった。

「そろそろまどか達が魔女の結界に乗り込む頃よ」

「……………「はあ!？」」

気持ちだけで充分だ【後】（前書き）

後編になります。

必要以上に慎重にならざるを得なかった結果がこれだよ！

ここからオリジナル部分とグダグダとご都合主義が展開されますのでご注意ください。

気持ちだけで充分だ【後】

——シア side——

「…またかあ」

放課後になり、私の携帯が震えた。…メール、お兄ちゃんからだ。

差出人：お兄ちゃん

件名：用事にて

すまん。

帰りにほむらが用事あるって言うから、一緒に帰れそうにない。
まどか達も用事あるって言うから、申し訳無いが一人での帰宅となるのを

お許しくださいっ！

- E N D -

「もうっ。最近付き合い悪いなあうちのお兄ちゃんは」

「どしたのシア？ …ああ、その顔はお兄さんからでしょ」

「なぜばれたし」

友達の里菜が私の携帯を覗き込んできた。

里等は私の親友一号なのだ。

「大方シアがそんな膨れっ面するのって、お兄さんの事以外あった記憶がないんですけど〜?」

そ、そうだったのかな…。

自分じゃ全然解らないけど…

「どれどれ」

「あつ、ちよ、盗らないでよ」

すると掠め取るように携帯を取られた。

ちよ、手グセが悪いのは相変わらずですか!

「…ふん。最愛の妹を差し置いてデートかあ。確かにこれは嫉妬するわ〜」

「デートって…。お兄ちゃんが、そんな事する訳ない…」
「ととと、ないよ」

二回程携帯の奪還に失敗。三度目にてやっとこさ奪還しました。

「わかんないよ〜? お兄さん、実は人気あるからね〜」

それは噂で聞いた事がある。

お兄ちゃんはかっこいい。これは妹である、この私シアが認めていきます。

気立てが良くて、優しくて。

成績は明日から本気出せば満点取れる…はず。

「ま〜、欠点としたら…」。

オタクっぽいつてくらい？」

お兄ちゃんがオタクなのを知ってる人は意外と少ない。
やっぱり表面ばかりみてるからなんだろうけど…。

「お兄さんと付き合う人って、結構“変わり者”だったり、なぐんて」

“変わり者”。

その言葉に、胸がきゅううって、締め付けられるような感覚に襲われました。

「変わり者…“だったよ”…」

「…え？何？」

「あつ、うつん、何でもない！

そ、それより、帰ろっ」

いけない。言っちゃいけない。

…ボ口が出る前にちゃちゃっと支度して、里等ちゃんの手を引いて教室からです。

「ちょ、ちょい待ち！？転ぶ、転ぶから！」

聞こえないフリをして一旦立ち止まって、急かすようにぐいぐい里等ちゃんの制服の袖を引っ張ります。早く！早く！早く！

本来ならこの「！」の所に「w」入りますが茶化すとカウンターが怖いのです。

「一旦離してつてば。鞆くらい取らせてよ」

「四十秒で支度なさい！」

ああ、そんなもたこらしてたらゴ。アテに真下に取り付かれちゃいますよ？

そういえば、久しぶりにあの人の事を思い出しました。
今日は、久々に私が紅茶入れてみようかな。

……お茶っ葉切らしてたかな？

あ、そうだ。

お兄ちゃんに知らせておいた方がいいのかな。

“さやかさんが野球部のバットを拝借してた”って。

— side out —

「なんでそれを先に言わなかったんだよ!？」

「先に連絡手段の確保が先決だったから」

「だからってああもう!行くぞ!」

「何処に?」

「まどか達の所だよ!」

「場所を知ってるの?」

「知りませんです!とつとと案内してくれやがれ!」

——ミツキside——

焦ってる。めっちゃめっちゃ焦ってる。
焦りもするわ！

「しばらくは大丈夫なはずよ」

「大丈夫って何が！ あとしばらくってのは不安だ！」

もう今すぐにも飛び出したいが、まどか達の居場所が解らない。
魔女の居場所とかなら時間を掛ければ見つかるが、スピネルがいな
い状態じゃ広域探索は無理。

「落ち着きなさい。今は、バマミが付いている。…安全とは言い難
いけど」

「…マミさんが？」

昨日まどかとさやかを助けた後、たしかに二人の事をマミさんに任
せたが、二人を巻き込めと言った覚えはない。言っはずがない。

「まどかとさやかを魔法少女にさせたいのか…」

「あなたの忠告も微妙だったから余計…かも知れない」

そうは言うが、ハッキリと言えない事情があるのは理解してるクセ
に。

とにかく、早いとこ三人がいるところに行って引き止めなければ…。

「スピネル！まどか達の居場所は特定出来るか？！」

「声に出とるぞ。少しは冷静になれ」

「近くににいるのか？ ならとつとこつちに合流してくれ！すぐ

に広域探索だ！」

「怒鳴らずとも此処におる」

近くの木の枝が揺れたと思ったら、黒い猫っぽいやつが降りて来た。
スピネルだ。

おいめちやめちや近えじゃねえか。

「だが今はそんな事どうだっていい。重要な事じゃない」

そうだ、冷静なッて素数をだな…。

目を瞑り軽く深呼吸。

「行くわ」

軽く落ち着いたのを見計らったのか、ほむらが声を掛けてきた。いつの間にか魔法少女の衣装へと変わり、何時でも行く準備万端だと思いで語っている。

「おっし、スピネル！」

「ふん」

駆け寄って来たスピネルを回収、肩に乗せてエフィケイアを取り出す。

戦闘モードならすぐ、でもないが、発見が早くなる。現場に急行する事も難しくない。

「展開」

スピネルの一言ですぐさま変身。

制服では無くなり、黒のファンタジックな服に黒のマント、スピネ

ルは花のブローチに。

「行ける。で、場所は」

「じゃあ、私の手を取って」

「手を？ では失礼して」

ほむらからおもむろに差し出された左手を優しく手に取る。

軽くエスコートする気分だ。∴正しくはされる側なんだけどな。

「∴離さないでおいで」

すると、ほむらの左手の楯に変化が起きた。

楯の一部が開き、内部の歯車のようなものが高速で回転し始めた。

そして、カリカリとネジを巻くような音と共に傾いた。

「∴」

「∴おお、これは」

「ほう、これが貴様の隠し玉か」

辺りを見回すと、景色が灰色になり、音が消えた。聞こえるのはほむらの楯から聞こえる、キリキリと音を立てている。

「止められる限りがある」

「大体分かった。んじゃさっさと行こうか」

ほむらの手をしっかりと掴み、互いに高く跳躍。あちらこちらの壁を蹴ったり建物の間を飛び越えたりと手を引かれるまま目的地へのショートカットを繰り返す。

「まだか？」

「すぐに着く」

さすがに身体強化しての道のりとは言え人の足だ。インスタントの食い物が出来る三分で着くとは思ってないが。

ほむらがあまりスピードを上げないのは、俺の手を引いているからだろう。

「…ほむら」

「何？」

「ちよいと失礼！」

「っ！？」

考えた手段が一つ。

引っ張られるのではなく輸送すればいいんじゃない？

てなわけで、ほむらの手を引き、無理矢理こちらに引き寄せて抱き抱える。

端からみたらお姫様抱っこの様な形だな。

「ちょ…！？」

「軽いなあほむら。よし、スピネル！加速装置だ！」

「よかるっ」

ほむらを抱えたまま軽く跳躍。そのまま体をやや前のめりに倒すと、足の裏に魔法陣発生。

「跳ぶぞ曉美ほむら。精々振り落とさせるなよ？」

膝を曲げて、裏の魔法陣を床や壁に見立てて…真っ直ぐ跳ぶ。

「これなら普通なら、着かない時間でも、きょうきょ駆け付ける事

が、出来る！」

跳んだ先にさつきと同じ魔法陣が発生。さっさと同じように蹴りだして左に跳ぶ。

「ほむら、ナビよろ！」

「…っ、右」

「応！」

この魔法、ピンボールみたいな要領で、最初の魔法陣が、一番最初に打ち出す装置。

次に出る魔法陣は強く跳ね返すバネ。

これで加速の勢いを殺すことなく高速で移動出来る。

…欠点としては、直角にしか移動出来ない事と、加速の勢いが失くなる前に次の発生させる位置と地形を頭に入れておかなきゃならない事。二番目の位置に関してはスピネルが大体やってくれるが、地形把握は俺の仕事で…。

どっかのみたく「サンダードリフト！」とか出来ないからな？

「あの建物」

「もう着いたのか！速い！」

直角跳びを繰り返す事数度、目的地にかっ飛びながら到着。
…遠目からだが、微かにまどからしき人影が見えたような。

「もう止められるのも限界」

「了解。テキトーな場所に不時着する」

「…え？」

アテンションプリーズ。

この高速移動術は加速を強め過ぎるとブレーキが効かなくなるため、お客様はシートベルトを着用の上衝撃に備えてくださいまし。

「背中からダイナミック不時着ッ！」

「ダイナミックって…っ！？」

ある程度壁なり床なりをブレーキ代わりにしたが、こうかはいまひとつのようだ。

せめてほむらにダメージが通らないように体を丸めて硬くなさそうな辺り目掛けて不時着！

「ぐふうっ！？」

「…っ！」

爆音を立てて無事到着。

かなりの音だったが、大丈夫か？

「…ご、ご無事で？」

「ええ。おかげさまで」

何事も無かったように立ち上がるほむら。サツと付いた埃を払い、長い髪を首元から外に一撫で。スタイリッシュだなあ。

するとほむらの楯からカチャリと音がした。どうやらタイムオーバーのようだ。

景色に色が戻り始めている。

「動き始めるから、用意して」

「あたた…。もうちょいタンマできませんかねえほむらさん」

魔女に遭遇する前に満身創痍とか悪い冗談だ…。まあ自分が招いた

事態なんですけどね。

こちらも埃やら砂やらを払い、懐からいつもの仮面を取り出ししておく。

「…こつち」

「ああ。…と、そうだ。ほむら」

「…？」

まどか達の所への移動中に、ほむらに投げ渡す。
グリーンシードだ。

「先にやっときな」

「…」

受け取ったほむらは何も言わずに、自分のソウルジェム部分に当て
穢れを取り除いた。

…うん。回復出来たようなので、グリーンシードを投げて返してき
た。難無くキャッチしてまた懐に仕舞う。

「……ありがとう」

「…気にすんな」

照れたような小さな声だったが、俺にはハッキリと聞こえた。
これがクーデレというものか…！

「…」

少し歩くと、ほむらが物影に身を潜ませる。見付けたのか。
それに習いこちら素早く身を隠す。

幸いホテルか何かの廃墟らしく、隠れる場所には困らなさそうだ。
するとほむらが目配せで、あれを見てみると言ってきた。見付から
ないよう覗き込む。

「…二人共、ここから先は付いて来ちゃダメよ」

「え、でもマミさん…」

「美樹さんはここで鹿目さんを守ってて。…いくら何でも、結界の
中に連れて進む訳にはいかないわ」

調度こちらは三人を上から見る形になっている。つまり二階辺りに
いるってこと。

…どうやら結界突入前だったようだ。何とか間に合った。

「マミ、連れて行ったらどうだい？ 魔法少女の在り方を説明する
良い機会だとボクは思うよ？」

「…キュウベえ、悪いけどちょっと黙ってて」

「やれやれ」

まどかが抱えていた噂のキュウベえがスルリとまどかの元を抜け、
隅にあった廃材にちょこんと座った。

後はテキトーに話し合えってか？

「…鹿目さんと美樹さんは、どうして魔法少女になりたいって思っ
たの？」

こちらに伝わるマミさんの口調は、どこと無く重い。

「私は、そうなるしかなかったから」

マミさんが魔法少女になった理由は、昔聞いた事がある。…あいつと一緒にいた頃に。

「でもあなた達はならないっていう選択があるの。選択の予知があるなら、ならない方が良い。絶対」

事故に遭い、死ぬか生きるかの瀬戸際での契約。選択の予知など無い。

「マミさん…」

「鹿目さんも美樹さんも、ご両親にお友達、あなた達を心配してる人がいるんでしょう？　ならその人達に悲しい思いをさせてはいけない」

…胸が苦しくなる。

マミさんも何処か苦しげに胸を押さえているのが分かる。多分、あいつの事を思い出しながら話してるんだと思う。

「……前にね、友達を悲しませた事があったの」

思わず目を逸らす。

苦しすぎて逃げたくなる。

「…っ」

「……」

突然ほむらに腕を掴まれる。

自分でも無意識に逃げ出そうとしてたらしく、足が勝手に歩き出そうとしてた。

それを止めたほむらが、相変わらず無表情だが首を振る。
逃げるなど言っているようで。

「その友達はね、私と同じ魔法少女だったの。…幼馴染みでね」

ぽつぽつと語りだすマミさん。

マミさんも辛いだろうに…。

「その子、ちょっと変わった子でね。何をするにしても強気っていうか、馬鹿馬鹿しくなるくらい前向きなの」

「それでいて優雅で、気品に満ちていて。私なんかじゃ太刀打ち出来ないくらい強かった」

マミさんとあいつの出会いは強烈だった。マミさんも思い出して苦笑していると思う。

「その子にはとても大切に思っている人がいたの。勿論、魔法少女の事は知らないわ」

実際は知らないフリをしているだけで、全部知っている。

話さないのは…、原因が全て俺にあるから。マミさんが責任や負い目を感じる必要は無い。

「私は何も知らないあの子から、“桜華”^{おうか}を、死なせてしまった…

もういい加減飛び出して話を遮りたいが、体が言う事を聞かない。
あいつの名前をマミさんが口にするだけで心臓が潰れそうになるくらいキツイ。

「それって…」

「魔女に…、いいえ、違うわね。
私が殺してしまったも同然よ」

「……出るわ」

「……」

「…後から来なさい」

ほむらがまどか達の元へと向かう。俺は…

「…盗み聞きは感心しないわね」

「ほむらちゃん…」

「ほむら、あんた…」

覚悟、決めた方がいいか…。

足が震えて今にでも崩れそうだが…、うだうだしてられない。一発顔をひっぱたいて気合を込める。

今更怖じけついてどうすんだ。

「もう一人いるんでしょう？」

いい加減隠れてないでこっちにいらっしやい」

ばれてーら。

とにかく動揺を表さずに平常心、平常心…。

こういう時こそネタ帳に書き込んだネタを脳内再生して落ち着くん

だ。ほむらがネコミミ付けて「ほむう!？」って驚いたところをぶふっ!やべ吹いちゃった。

「命拾いしたな。今儂がほむらへの念話を切っていなかったらどうなってたか」

「後悔もしなければ反省もしない」

…何気に落ち着くもんだな。

すぐさま深呼吸して、用意してた仮面を装着して、いざ。マントを翻し颯爽と姿を現す。

『隠れていたつもりは無かったんだがな』

「意地悪ね、相変わらず」

「ピエロさんまで…」

隣のはむらが心配して損したみたいな視線を投げってくるが、スルーの方向で。

『…それはさておき、巴マミ』

軽く跳躍し、一階に着地。そのまま歩いて三人の元へ歩いていく。後に続いて、ほむらも降りてくる。

『そいつらを結界内に連れて行くつもりか?』

「まさか。置いていくつもりよ」

そうならいいけど…。

「あ、あの!」

『…何だ？』

さやかが拳手した。

はい、美樹さやか。とか選ぶつもりは無いが、妙な理由で付いて行きたいなんて言ったら、ほむらに協力仰いでお得意のほむら毒舌で黙らせよう。

「私達も連れて行ってください！」

『駄目だ』

「一緒に魔女を倒したいだなんて無茶言わないけどさ、見届けたいのよ！」

『尚更駄目だ』

「それでも、私達…」

すると、まどかの目に強い意志のようなものが見えた。

…本気、か。

「偽善で、自己満足だけど、ほむらちゃんが言ってたんです。魔法少女は、知られずに消えていくって」

胸元を握り締め、意志が固い事を示している。…昔から、まどかは意外に頑固だったりする。

たま〜にハッキリしなかったり、自分の事を卑下したりするが、自分がこう決めたら曲げない。…何と言うか、良い意味で困った奴だ。

「私は、忘れない。

忘れたくないです。

あんな事があつたな、とか

そういえば、みたいな事で忘れたくないんです！」

「そりゃあ、危険だつてのは解ってるつもりだよ。あんたやほむらやマミさんからすれば、ふざけるな〜！って感じだろうけど…」

「それでも、偽善でも何でも、私達は忘れたくないんです！」

……忘れたくない、か。

「ふん。馬鹿馬鹿しい…」

「……確かにな」

確かに馬鹿だ。

自分から、しかも忘れたくないっていうそれだけで死地に乗り込もうとしているんだから。

思い上がりもいいところだ。

「ピエロさん！お願いしますー！」

「あたしも、お願いしますー！」

深々と頭を下げるまどかとさやか。

無茶苦茶だな、まったく…。

「鹿目さん、美樹さん。気持ちは有り難いけど…」

『まどか、さやか』

「は、はいっ」「」

名前を呼ばれ、はつと頭を上げる二人。…この俺の甘さを、ほむらとマミさんは良く思わないだろうな。

『お前達の心意気は解った』

「じっ、じゃあ…！」

まどかとさやかの表情が明るくなる。連れて行ってもらえる、とても思っただのか？

『だが駄目だ』

「な、何で…！？」

『何故も何も、お前達の気持ちは嬉しく思う。確かに嬉しいが…その気持ちだけで充分だ。充分過ぎるくらいな』

ほむらとマミさんは何も言わない。事の成り行きを俺に任せただのか。

『忘れたくないのなら、俺達を覚えていてくれるお前達が死んだら、何もならない』

「そ、それは…」

『それだけ強い意志があるのなら待つていてほしい。帰りを』

「帰りを…？」

帰りを待つ。

母にも、あいつにも言われた事だけど

「帰りを待つのも立派な仕事」

とか言ってたっけ…。

『ほむらと巴マミが帰れる場所を守る事も大事じゃないか？』

「ほむらちゃんの帰れる場所…」

「マミさんの帰れる場所…」

ちょっと難しいか。

まあ、後はよく考えよく悩め若人よ、ってか？ 俺も若いけどさ。

「ミツキ、曉美ほむら」

不意にスピネルが声を掛けてきた。

今まで黙ってたところ、そろそろ魔女の所行けやと催促されるかな。

「付近に知らぬ気配が混じってきたぞ。警戒しろ、こちらを見ておる」

…知らない気配？ まさか、な。

「気配のパターンは？」

「待て…、この波長の型は成る程“魔法少女”だ」

…魔法少女？ 新しい魔法少女か。スピネルは波長…魔力の波みたいなものを感じ取って誰かを判別できるらしい。

「…どういうこと？」

「息を殺してこちらの機を伺ってる奴がいるって事だ」

こちらを見張るだけ、様子見するんなら気配を極力隠し、聞く事に徹すれば見付かる可能性は低い。

が、この視線の主は隠そうとせず、獲物を狙うよう身を潜ませてい

る。

気付いたなら掛かるまで。

「あやつは肉食獣か何かか」

上、しかもかなり高い位置から見ているようだが、スピネルレーダーに引つ掛かったら見えているのと一緒にだ。

「ほむら、逆にまどか達をここに残すのが危なくなった」

「…どうするつもり？」

「俺がアレの相手をする」

念話でほむらと役割分担。しかし、どうやってまどか達を行かせるか。

一緒に行くとなるとさっきと言った事と矛盾するし、誰かいると言えば、向こうはすぐさま容赦無く襲ってくるだろう。

対魔法少女戦で、まどか達を守りながら戦うのはかなり苦しいものがある。

ここは一か八か。

無理矢理こちらに目を向かせ、ほむらとマミさんの護衛付きで結界に飛び込ませるしか……いや待てよ？

「矛盾してしまうなら、アレを利用しない手はないな」

「…何をする気？」

「まあ、見てな…」

まどかとさやかに付いているマミさんにも、上の奴にも気付かれないうエフィケイアを変型させる。

極力音を立てず静かに。銃口は上に展開させ、何時でも撃てるようにする。

『…話はまとまったか？』

変型完了。こちらの準備が調ったのでマミさん達に話しかける。
こっからが勝負だ。

「ええ、まあ。鹿目さんも美樹さんも、ここで帰りを待つって事で
合意してくれたわ」

『そうか。…だが』

スピネルに、エフィケイアのチャージを始めさせる。なに、すぐさま溜まるからラグは殆ど無い。あるとすれば、周囲に影響があるくらいだ。この形態は。

『ここで待たせる訳にも』

ほむらに念話で合図を送る。
まどか達を庇えるようにと。

『行かなくなった…ッ！』

早撃ちよろしく身を翻して天井に向けて――

『いつまで見てやがる…！』

レールガン
“電磁砲”

をぶっ放す。照準を点ける必要はない。相手を驚かすので十分だからだ。

しかし威力は弱めない。

空気を貫く爆音と、圧縮された弾丸が発する磁力と電力の暴風が吹

き荒れる。

天井に風穴を空け、大量の瓦礫と共に“アレ”が降ってきた。

「…っ！」

すぐさま再チャージ。

「な、何！？何なの！？」

「下がって…」

巻き上がる埃と煙に隠れているが、構わず銃口をいるであろう方へ向けてもう一発…と、煙から何かが飛び出し、近場のガラスを割り逃げ出して行った。

「あれは…」

『ここに残せない原因だ』

チャージはそのままに、スピネル…はもう波長を記憶したらしい。ならすぐに追撃できるな。

『別の魔法少女だろう』

「別の…ですか？」

『説明は後だ。ほむら、巴ミミ。状況は解ったな？』

ほむらは頷くが、マミさんは…

「外より結界の中の方が安全なんて、笑えないわね」

解ってくれたみたいだ。
理解が早くて助かる。

『まどか、さやか。二人から離れるんじゃないぞ』

「は、はい！」

「まどかはあたしが守ります！護身用にこれもあるし！」

二人からハッキリとした返事が返ってきた。これなら大丈夫だろう。
…しかしあのさやかが持つてる包みは何だ？

「さ、行くわよ皆。曉美さん、だったかしら。…よろしくね」
「…ええ」

こっちも大丈夫みたいだな。

「ミツキ、奴が停止したぞ。追いつくなら今が好機ぞ」
「あいよ」

結界に突入する四人を見届け、奴が逃げ出した所から外に出る。

屋上へと移動。

もう一度スピネルに探らせると、まだ動いてない様子。

やはり相手は野生動物か何かか。すぐさま逃げればいいものを。

『……さて』

「此処から南々東におる。さほど遠くはない。かましてやれ」
『言われずとも。このレールガンの射程距離を甘く見んなよ？』

銃口を奴がいる方向に差し向ける。既にチャージは完了してるのでバッチこい状態。

『照準セツト』

エフィケイアの残りパーツで銃身を固定。吹き飛ばされないよう俺の足腰にも支えを作る。

「誤差修正……………放て」

トリガーを引く。

爆音と衝撃波と共に黒い質量の塊が奴に向かって行った。

『…ふう。ピーキーな仕様はこれ以上増やせないか』

「ロジックと凡庸性の問題だ」

すぐさまエフィケイアをライフル形態に変え、奴に向かって跳ぶ。あれだけ身軽なら避けているに違いないだろうし、掠っても回避にペナルティは付く。

「近いぞ」

いくつか建物を飛び越え、気配を捜す。

予想と違って不意打ち気味に撃ったから対応出来ずに直撃したか？

「何にせよ警戒しろ」

スピネルに言われずとも警戒は緩めない。

反応が一番強く出ている場所、どっかの敷地の広そうな屋上に着地。

注意深く辺りを見回す。

ここにきて、新しい…しかも知らない魔法少女。ほむらが言った通り、あのキュウベえってのが生み出したのか。魔法少女自体に別の魔法少女を生み出す能力が…あつたのなら話は別だ。

どちらにしろ、こちらを襲う気なら容赦はしない。痛い目を見て退散してもらおう。

「――上に回避！」

『っ！』

下段ガードを固めた俺に隙は無い！

指示に従い跳躍。視界に一瞬だが光る何かが映った。

糸か？ 糸ならばリッパーで対処可能だが、さて…。

『姿は見えないな』

「ならやる事は解っておるな？」

『あぶり出す！』

懐からエフィケイアの一部パーツ、ダイス状の部品をライフル形態の上部にスロットイン。

そしてその上部を後ろにスライドさせると、その先から新たな銃口が姿を見せる。

『ツインライフルを喰らえい』

狙いなんかつけず、躊躇無し、思いのままトリガーを引く。

「結界を張るまで待てんかったのか…」

『我慢出来ねえってやつだ』

響き渡る銃声。

片方は単発式、新たに出した片方は連射式なんだなコレ。

魔力の弾丸を空中から地面に向かってありったけばらまく。さっきも言ったが狙いなんかつけない。

次々と建築物に風穴を空けまくる。

『…ふう』

「多少外に聞こえたな」

『間に合っただんだからよし』

スピネルが張った結界つてのは、人避けと消音と空間ずらしの結界。簡単に言えば魔女の結界と同じようなものだが、一般人を巻き込むような事は無く、弾痕だつてスピネルの作った結界内で発生した事だから実際の場所では影響は無い。

…まあ、多少弾痕が残ったかもしれない。あと多少銃声が…。

「さておき、まだ反応があるぞ」

『おつ』

再びエフィケイアを構え直し、見えない相手に警告を発する。

『いるのは解っている。大人しく姿を見せなければ、出てくるまで一帯を破壊しつくすだけだ』

勿論嘘だが、あれだけぶっ放したんだから多少なり真実味はあるよ

うに見えるか。

『……………』

「……………はいはい
降参降参。だから撃たないでよ」

ようやく現れた。

屋上への出入口っぽい所の裏から現れたのは、水色を基調としたシスターっぽいような服装からして間違いなく“魔法少女”だった。両手を上げて白旗まで持って降参のポーズをしている。

「いや〜ビツクリしたよ〜。だっていきなり足元からブツパしてくんだもん。バランス崩して落ちちゃったじゃん」

『……………』

「あなたが噂のピエロさんってヒト？ 初めて見たから写メ撮っていい〜？」

『…随分お喋りだな』

よくもまあペラペラと…。銃突き付けられてるっての解ってるのか？ 或はこの状況から逃げられる作戦か何かを隠しているのか…。

『幾つか質問する』

「私の意思是〜？」

『あるわけが無い』

「ぶ」

ぶうたれようが話を進める。

スピネルがいつキレだすか分からんし、向こうの状況も気になる。

『何故あそこにいた』

「たまたま」

奴のすぐ足元に射撃。威嚇だ。

「ぎゃあ！？ な、何すんのさ！？」

『次は当てるぞ。いいな？』

再度銃口を奴に向ける。

あんまふざけた事をするならばってやつ。こういう奴には効き目がある。

「ホントだつてば！魔女の気配探してたらたまたまあの縦ロールと二人がいて、次にあなたともう一人来て、魔女がどーたらって聞こえたの！」

それで、魔女やつつけて出て来たところにグリーンシードをもらおうとしただけだってえ！」

『それだけか？』

「sonだけだつーの！もう怖いからそれどっかやってよー！」

……うーん、判断に困った。これは十年やって初めて会うタイプだな。

あいつもう半分涙目だ。あれが演技だつてんなら大したもんだが、足震わせながら言ってるちゃあ説得力皆無だもんな。

いや、逆に信憑性が増すのか？

「……どう思いますスピネルさん」

「……知らん、勝手にしろ。」

もう戦う意思も感じ取れん」

おおう、スピネルも呆れて投げた。…ど、どうしよう？ と、とにかく話をして考えるか。まずは話だ。うん。

「…取り敢えず事情聴取だな」

「ねえ！話すからさ、それどっかやってってば！」

…エフィケアの事だろうか。

しかしながら前にそれで不意打ち食らわされた事があったからなあ…。

「…抵抗しないと誓えるか？」

「しないしない！絶対しない！マリア様に誓っちゃう！」

「…誓わずとも手を合わせて拝めばいい」

「…お？」

とてつもない拍子抜けにどっと疲れが…と、うなだれる前に尋問だ。聞こえないよう軽く溜息をつき、エフィケアを畳んで変型させ、後ろ腰のホルスターに仕舞う。

「おー！カッチョイー！」

「……」

緊張感一切無しか。

反応に困ったのは初めてだ。不思議と邪気が感じられない。

『改めて尋問をする』

「はい」

『その前に。変身を解け』

「えゝ？ ……まいつか」

渋々、だが変身を解いた。

…ん？ 制服？ 何処の学校だ？

「はい」

『じゃあまず……………』

「…？」

「どうした」

「何聞こうとしたか忘れちった」

「……………」

えっと……………ああ、思い出した。

魔法少女になった理由だ。

『まず、お前が「あむ」…何？』

「あむ！お前じゃなくて、あ・む！」

『……………』

「あむ！」

『……………あむ』

「よしよし」

胸張ってるがお前今威張れる立場じゃないだろ…。ああもう何か色々折れそうだ…。

……で

問一。名前と年齢は？

「はい！朝月あむ。あさつき」

十二才の小六です！」

そうですかお若いですね

「ピッチピチです！」

問二。何で魔法少女に？

「夢のため！立派な大道芸人になるためと、家族を守るため！」

意外とマトモだった件

「ドヤア……」

問三。いつ頃魔法少女に？

「今日！」

…は？

「今日のお昼頃！白いぬいぐるみみたいのが来て、なった！」

そうですか決断早過ぎですね

「それほどでもない」

こいつ全くのビギナーだったというか頭痛が痛くなる…。

『……………』

「どうにかしろ」

「どうにも出来ません…」

いやいやまだ大丈夫だ。

まだ真っ白なら何とか悪い方向に持って行かなければ大丈夫だ。そう、まだ大丈夫だ。

…そんなキラキラした瞳でこっちを見るな頼むから。

『……………』

「あの〜ところで」

『…何だ』

「あの時おとなりにいた髪の長いクールな人はピエロさんの彼女なんですか！？青春なんですか！？」

『ちよつと黙つてようか』

「ぶ〜」

だからぶ〜たれても駄目。

ああもうどうするか…。例えこいつがビギナーでも、軽々しくまどか達に会わせて油断してる最中に…何て事になったら最悪を通り越す。

「ミツキ」

…と、おお。救世主ほむら！
天の助けとはこの事か！

「ほむらナイスタイミング！」

「…？ こちらは済んだわ。グリーンフシードも手に入った」

「まどかとさやか、マミさんは？」

「全員無事よ」

そうか、それは良かった…。

さて、こつちの問題も何とかしてくれますかねえ…？

「あなたの方は？」

「ああ…、無事は無事だが…」

「…？」

「新しい魔法少女が仲間になりたそうにこちらを見ているんだが、どうしますか？」

取り敢えず、丸投げしてみた。

説明も詳しくする程多く無いので軽く経緯説明。

「……………」

「どうしましょ」

「あなたが自由にすればいい。

こちらに害が無いのなら、ほって置くのが一番だけど」

で、でたー！丸投げ返し！

呆れてもうどうでもいいような溜息付属で返された！

「丸投げした主も大概じゃがな」

「投げたくて投げるんじゃない。投げてしまうのが俺」

「…後はあなた次第よ」

あ、ほむらが念話切った。

おいィ。

『…仲間になるか？』
「なります！」

TIPS：2（前書き）

【Bygone Story】

ピエロと紅茶と魔法少女

.

TIPS：2

——昔の道化師——

『これは一体どういう事だ?』

「…魔女退治」

『明らかに結界の外で暴れただろ』

「私にはどうする事も出来なかったわ。いつも通りだけど。…あら、新しい茶葉かしら」

『優雅に紅茶を飲むなバマリ。

…で、この隠しきれないクレーターを作った本人は何処だ』

「あそこでティータイムよ」

『…? ……またあいつは』

「高い所で沈む夕日を見る！
強敵と戦ったら見るもの！
って言うてあれよ」

『お前の友人だろ早く何とかしろ』

「あとね」

『まだあるのか』

「愛を叫ぶって」

『引きずり下ろしてくる』

「戻ったら三人で飲みましようね
新しい紅茶とお菓子が待ってるわよ」

『話はあいつを止めてからだ』

.

TIPS：2（後書き）

その日の夕暮れ
見滝原町に

貴方が死ぬほど好きだから

という告白が町中に響き渡った

ピエロは死ぬほど恥ずかしかった

.

ほんと、久しぶりだね【前】（前書き）

原作二話ラスト辺り〜原作三話に入るまでになります。

また前編だよ（呆）

しかもグダっております。

ここからが本当の地獄だ…。
グダグダ

ほんと、久しぶりだね【前】

「皆さんはじめまして！」

「……………」

「へえ、この子が」

「可愛い〜」

「なんか一番コスプレチックだな〜。教会のシスターっぽいよね」

ほむらは呆れ、マミさんは品定め。まどかとさやかはあむの変身姿に興味津々。

「朝月あむです！ 先輩方、ご指導ご鞭撻の程、よろしくおねがいします！」

『……………』

…はあ。甘いよな、俺って。

結局連れて来る事にした訳だが、まだまだ気が抜けなかったり。本当にいつ裏切るかも解らんし…、ああ。ほむらに関しては扱いは別って事で。

「やあ、あむ」

「あ、白いのさん！」

「ボクはキュウベえって名乗ったハズなんだけどなあ」

出やがったな原因。

口ぶりからすると、コイツがこちらで魔法少女を生み出している元凶か。

「キユウベえあなた、朝から見掛けないと思つたら契約を迫つていたのね？」

「たまたま彼女を見付けてね。
良い素質の持ち主だったからなつてもらつたんだ」

そんなホイホイ魔法少女が生み出せるのか。…あまり、いやこれ以上増やされても厄介事にしかないから止めてほしいんだが。

「……」

「ほむら、ム力つくのは解るが今は落ち着け」

「…解ってる」

雰囲気的にほむらが

「…ついついム力ついて討っちゃった てへぺろ」とかになりそうだったので一応注意しとく。

…ほむらがてへぺろ とか考えただけで身震いと鳥肌がヤバイ。けどそれはそれでアリか。

（…ほむらのぶりっ子した姿とかS A N 値（正気）直葬もんだな）
「……」

いつの間にか俺の背後に回り込んでいたほむら。背中に固いモノを押し付けられていた。

それ、銃かなにかですよね？

「五臓のうちどれを撃ち抜きたいのかしら」

「心臓をロストしたくなくば早々に詫びを入れるべきだな」

「ごめんなさいでした…」

何故バレたし。

「…？ ほむらちゃんどうしたの？」

「いいえ、何でもないわ」

何でもあつたんだがそれを言ったら口を縫い合わせられそうだ。主に原因は俺だし？

さておき、マミさんはキュウベえをお説教中で、まどかとさやかは新人魔法少女に夢中、と。

…今は大人しくしてるみたいだな、あむの奴。このまま何も無ければ解散といきたい。

『巴マミ。そいつへの説教はその辺にしておいて、今日の所はお開きにするぞ』

「…分かったわ。キュウベえ、帰ったらこの続きからよ」

「ボクはまだお説教を聞き続けなきゃならないのかい？」

「当たり前よ」

まあ気持ちは解らなくもないが。

さて、マミさんは良しとして、まどか達はどうするのかな？

「あたしらも帰るとしますよ。まどかとも考えなきゃいけない事もあるし」

「そうだね。ピエロさんやマミさん、ほむらちゃんに言われた事、見たもの。じっくり考えたいと思います」

結界の中で何があつたのかは知らないが、良い方に向かっていると思つて大丈夫……

「今日は本当にありがとう、ほむらちゃん」

「…いえ」

「ほむらにもマミさんにも面倒かけちゃったし、しばらくは自重しなきゃね。」

「そうだほむら。助けてくれたお礼にさやかちゃん攻略ルートフラグをあげよう」

「それはバグで進行出来ない不具合が報告されてるから要らないわ」

「そんな…馬鹿な…！」

返しが上手くなったなほむらよ。

「あの、あの！質問いいですか？黒髪クールビューティーさん！」

「…誰のこと？」

『お前らしいほむら』

「クールビューティーだってさ、ほむら」

「暁美さんがクールビューティー、ねえ」

「…か、からかわないで」

照れとるがな。からかわれ慣れてないのがよく解る。

おかげで若干張ってた俺の気も緩んだ。

『んで、ほむらへの質問ってのは何だ。ああそれと、暁美先輩って読んでやれ』

「はい！そのですね」

…あれ？何故か嫌な予感がする。

「暁美先輩とピエロさんって、彼氏彼女のご関係なんですか!？」

「……は？」

「そ、そんな事あるわけないでしょう!！」

何故そこでマミさんが慌てて反論してはるんですか。

「ワクワク……!」

だからそんな期待に満ち満ちた顔されても返答しづらいんだが……、いや返答するのはほむらなだけだ。

「違うわ」

「え……!? 違うんですか……!?」

「……てか、色々助けてもらっというんだけど、素性の知れない相手と恋人になるってどうなのよ……?」

「何言ってるんですか美樹先輩!

そこにロマンがあるんじゃないですか……!」

この小娘ロマンとか言い出したが大丈夫か? 若干アツチ寄りな匂いがしないでもない。

『……どうでもいい。これ以上何もないなら解散するぞ』

「はい」

まだつままないって顔するな。表情豊かで明るいのには良い事だがそれとこれとは別だ。

「じゃあ私は鹿目さん達を送るから、お優しいピエロさんは朝月さんをお願いね」

『? ……ああ』

なんかママさんの言葉に小さい棘があるような…。何か気に障る事言っただろうか？

「解らんのなら相手に聞くなよ？ 逆鱗に触れるぞ」

「…スピネルがそう言うのなら」

追求と言うか、聞いたら聞いたでママさんに笑顔で嫌味をネチネチ言われるだろうな。空気で解る。理由は解らないがスピネルが言うなら間違いは大体無い。

そんなぐだぐだ考えてるうちに、ママさんは、まどか、さやか、ほむらを連れて帰って行く。

あむもまどか達に手を振っている。

…何と無くシヨボーンの気分だが、とりあえず俺も見送る。と、不意にほむらがこちらを見て……

「…朴念仁」

「！？」

……………泣けるぜ。

「あ、ピエロ先輩。ちょっと一緒に寄り道しませんか？」

『…寄り道？』

別に構わないが、少々落ち込み気味な俺としてはブラブラしたい気分だったし、遅くならない程度に付き合うか。しかしピエロ先輩ってのはどうなんだ。

「ダメ、ですか？」

『…いや、大丈夫だ』

「やった〜！じゃ早く行きましょ！早く早く〜！」
『ちよ、おい引つ張るな』

「はい到着です」
『…ここか？』

半ば引きずられるような形で連れて来られた場所は、俺とかが住んでいる場所からは少し離れている小さな公園だった。
見た限り人影は無し。
遊具も、ここ最近使われた様子が無い。

「うちの近くなんです」
『ほっ』
「で、あれに登ります！」

あむが指差したのは、動物の顔…のような、下にトンネルの開いた滑り台。
遊具の中では一番大きい。

『…犬か？』
「え〜？マンチカンですよ〜！」
『どうでもええわ』

素でツッコんでしまった。
マジでどうでもいい。

「よつと。いやゝ魔法少女だと一発ですね！ピエロ先輩もはやくゝ
！」
『……………』

いやね、確かに人影は無いけど今の自分の状態と俺の異様さに気を
使って…まあ、いいんだけどさ。

とりあえず言われた通り軽く跳んであむの隣に着地。

見晴らしは…普通。

てっぺんは子供三、四人程度がいられるスペースはある。

「よいしょ…つと」

来たのを確認したあむがその場に腰を下ろし、脚を滑り降りる方へ
投げ出した。

一応習って俺も腰を下ろす。

「えへへ…」

『？』

何故かニヤニヤしてるあむ。

そのまま上を、空を見上げた。

…日は完全に落ちている。

『…星か？』

「そうです。寄り道の理由です、」

星、か。しかし星なら家からでも見えるんじゃない？

聞こうかと思っただが、不意にあむの表情が曇った。…何と言つか、
淋しい…？

「私に大道芸、ヨーヨー教えてくれた先生が言ってたの。眠れない時や悩みがあったなら、星を数えると良いって」

『星を数える、か。随分なロマンチストだなその先生は』

「自慢の先生ですから」

エッヘンと何処か誇らしげに言うあむ。信頼してるんだな。しかし…。

『それをやってるって事は、悩みがあるんだな？』

「えへへ、まあ…」

悩み…。この場合なら、魔法少女になった事か。

「…今から、独り言言いますね」

『…解った』

「……私、学校じゃあちよつとした有名人なんだ。悪い意味で」

「勉強は出来ないけど、運動と指先だけは器用だからさ、学校の色々なものをイジったり、授業サボってヨーヨーとかの練習したりしてた」

「芸は周りの人を驚かせて、楽しませて、心を暖かくするもんだって。先生が」

「私のママとパパって、ケンカばっか…。だから、私が芸をいっぱ

い身につけて、二人を驚かせて、笑わせて、次いでに芸で一稼ぎするのが夢」

『純真なのか不純なのか』

「あゝもう、独り言にツツコミ禁止ですよ」

「こほん。…で、キュウベえに言った願いは、いつまでも芸が続けられますように」

「でも…。ママにだけでも相談しとけばよかったかな。…なんて」

…それっきり、あむまた星を数え始めたようだ。

普通に良い子じゃないか？話を聞く限りでは。

親のために、か。最近の子供が着く答えにしちゃ、よく出来てる子だよな。

『まあ、理由はともかく学校の授業をサボるのは見逃せないなあ』

「…だって、出たって…」

『…出たって、何だ？』

「何でもないです！ほらそれよりピエロ先輩も空見てくださいよ

！あ、星座探しましょう！」

…深く聞かないようにするべき、か。今、不意に過ぎった考えを振り払う。

『…つたく…。お前、星座解るのか？』

「甘く見たらダメっすよ」

修業の合間に星座早見表を作って見てるんですから！…じゃじゃん！」

と擬音付きで何処から取り出したノート等に使つ透明の下敷き。
見ると確かに星座がびっしりと描き込まれている。

「え〜と…。あ、あれだ！」

「…ん？」

「見えます？北斗七星！」

「…微妙」

「ほらあれですあれ！」

「…あ、あれか。珍しい」

「お面なんか付けてるからですよ〜」

正論ですね。やっぱり仮面越しからじゃ見づらいな。

「今の時期だと、今の時間帯に見れるんですよ〜！」

「なるほどな」

「こつやつて、星座を探しながら練習していると、星がお客様みたいに思えてくるんですよ〜」

「ほう。なら星達は貴重だな。未来のトリックスター朝月あむの練習風景を見れてるんだからな」

「いや〜それほどでも〜」

馬鹿話つてか、夢や世間話してるあむが一番生き生きしてるな。さつきまでとは随分と…。ま、思いがけずだが、あむの事を知れたな。

『あむ』

「…はい？」

『明日から訓練するからな』

「……！はい！」

『そんだけ立派な夢があるんだ。死にたくはないだろ？』

「モチのロンです！」

『なら、早く使い物にならないとな』

「よろしくお願いします！ピエロ先輩！」

『おう。気負うなよ？』

やる気は十分みたいだな。

…魔女を狩る審問官が身を守る手ほどきか。

いや、研究が完成したら、そういう思いをさせずに済ませられる、か…。

とにかく先の事をとやかく考えるより、今はあむを何とかしよう。
まどかとさやかには、ほむらとマミさんがいる。万が一があったら
ほむらの能力があるし。

さて、忙しくなるな。

ほんと、久しぶりだね【前】（後書き）

「あ、北斗七星の下に輝く星が」

『それは見つけない！』

「天を見よ、見えるはずだあの」『だから止めると言っている！』

ほんと、久しぶりだね【中】（前書き）

中編だつて……！？こんな普通じゃ考えられない！
ご都合倍率ドン！グダグダ更に倍！

ほんと、久しぶりだね【中】

現在地、結界の中。

時刻、夕刻辺り。

人数、自分を合わせて二人。

『あむ、行つたぞ!』

「任せてください!」

昨日約束した通り、あむの魔法少女訓練をしている。

「さあ、こい!」

『…あれが得物か』

「よーよー、だったか」

「ヨーヨーだな」

訓練といっても、いきなり魔女には当たれないだろうし、かと言って適度な魔女がいるはずもなければ簡単に見つかる訳も無い。

搜索手段を教えていたら使い魔が引っ掛かった。

調度よかったから、あむの基本を見ると同時に武装の確認も兼ねて…と。

「はああああああ……!!」

「ミツキ、小娘が何か出すようだぞ」

ふらふらとあむの方へ飛んで行く使い魔。
さあ、お手並み拝見。

あむが渾身の力を解き放つ…！

「秘技、特大ブランコ…！」

スル…。

使い魔これを華麗にスル…。

「…あれ？」

『おい』

あむをスルーし、逃げてしまった。

…もう、ね。

・
・
・
・
。

「すみませんでした…」

『…次からは真面目にな』

現在路地裏に身を潜ませて反省会。

一通りのお説教は済ませてある。

あむも十分反省したようなので、説教は切り上げて行いを省みてみよう。

『あの技の説明を求む』

「説明しましょう！特大ブランコとは！」

…かい摘まんで言うと

潤沢な糸を存分に広げ、両足で下方左右を押さえて上の部分は手で持ち…普通より大きなブランコを形成する。ヨーヨー本体に魔力を流し、威力を向上させ、揺らすのではなく回転させてぶつける。

「つまり！それに驚いた敵はヨーヨーに当たってそのまま骨になります！」

『……………』

「カンペキ過ぎて怖いくらいです！」

ドヤア…と踏ん反り返るあむ。

『…お説教延長戦』

「うえっ!？」

当たり前だ。更に一時間の正座お説教をあむに聞かせた。

俺だって説教なんかしたくはないけど、こんなじゃいつ命を落とすか解ったもんじゃない。

『次やったら軍隊式スクワット千回やらせるからな』

「は、はい…じ、自重します…。あ…足が…」

何だ痺れたのか。

…まあコンクリの上だったからしょうがない。このまま置いていく事も出来たけど…。それではさすがに可哀相だ。

『ほれ』

「す、すみませ…あががが…」

おんぶして途中まで送るとする。誰かをおぶるなんていつ以来か。昔まどかが遊び疲れて眠っちゃった時とか、さやかが馬鹿してすっ転んだ時とか？

シアが甘えてきておんぶして帰った時…。

『しっかり掴まってる』

「あい…」

なるべく振動を与えないよう着地の衝撃を抑えて跳躍する。

…途中、快適♪快適♪なんて聞こえたからワザと振動を加えて悶絶させたりもした。

『そろそろ着くぞ』

「了解です」

とりあえず昨日来た公園まで送る、という事に決定した。家の前までは（俺が）勘弁って事も含めて。建物から建物へと跳び移る。

「……ピエロさん」

『どうした』

「あれ何ですか？」

すると、あむが指をある方向を指差した。えっと…、何処だ？

『…？』

「あれ、あれです。あの人混み」

とりあえずそこら辺のマンションの屋上に降り立つ。

周囲にバレないようにあむと身を潜めながら、あむが示した場所を見た。

「事件ですかね」

『…ふむ』

あむね言う場所一角に人混みが出来ていた。パトランプが点灯して
るのがここからでも見える。

警察が来てて大きな騒ぎになってないのが少し気にかかった。
エフィケイアのパーツを一つ外し、双眼鏡に変形させる。

「うわ、便利ですねそれ」

『慣れてくれば出来るようになるさ』

改めて双眼鏡から騒ぎの場所を覗き見る。

『…何だあれは？』

「うう、微妙によく見えないです…」

『ほれ』

「あ、ともです」

更にもう一個変形させて双眼鏡をあむに渡す。

…ピエロに背負われた女の子が互いに双眼鏡覗いてるとか異様な光
景だな。

とにかく、騒ぎの原因は確認した。

建物や地面に無数に付けられた“傷跡”が原因だった。

「うわ、なんですかあれ」

『…爪跡、か？』

見る限り、人為的に付けられる跡じゃない。壁から地面に向けて地
塵や破片すら落ちてないなんて、抉り取ったとしてもあれほど綺麗
に残るはずがない。

「…魔女、ですかね？」

『現実には干渉出来る程強い魔女、か…』

いてもおかしくはないが…。

「スピネル、波長は？」

「…妙だ。波が乱れていてみれんぞ」

「…マジか」

ジャミング？ 偽の痕跡を残すような魔女は知ってるけど、スピネルの感知能力を阻害してくるのか。

「ピエロさんピエロさん」

『…ん？』

「ソウルジェムには反応無いみたいですけど…」

あむのソウルジェムにも反応しない。

スピネルの感知能力から逃れる術がある。
となると

………魔法少女か。

魔法少女がやったという答え。

仮にそうならばこれは危険かも知れない。

しかもあむの家から近い位置でこれだ。

しかしいつまでもこうしてる訳にもいかない。自分の双眼鏡をブロツク形態に戻し、今だ覗いてデカイクマさんかな？ だのライオンかな？ だの呟いているあむの双眼鏡を取り上げて同じく元に戻してエ

フィケイアに戻す。

「あゝ」

『帰るぞ』

「はい」

あむを背負い直しその場から離れる。

色々考える事はあるが、とりあえずはあむを送り届けてからだ。その後はスピネルと会議、と。

そして、あまりあむとの会話もなく、あっさり指定場所に着いた。大丈夫になったあむを降ろし、変身を解かせて二つ三つ注意を。最後に…

『最後に』

「はい」

『しばらくは一人で絶対行動するなよ？』

「…了解です」

意図が伝わったらしく、少し引き締まった表情になるあむ。

「明日も特訓ですか？」

『明日のは中止して、バマミ達と行動を一緒にするんだ。事情を話せばほむらも協力してくれるはずだからな』

「了解です」

こんなもんか。

じゃ、ササツと退散だ。

例え人目が無さそうでも油断大敵。昔気を抜いてて警察に見つかりかけてエライ目に遭った事もあったっけ…。

『それじゃあな』

「はい。ありがとうございました！ピエロ先輩もお気をつけて！」
『…ああ』

敬礼してまで見送らんでも。
あと左手で敬礼すんな。

——翌日、朝——

「…むう…」

「何という事だ…。今日は雹が降るかも知れん。頭上に注意せねば…」

「うるさいよバカ」

珍しい事もあるもんだ。万年寝ぼすけの俺が早起してる。

まだちょっと眠いが、早く目が覚めるしまったのだからしょうがない。二度寝する考えも出なかった。

時間は…午前七時ちよい前。奇跡だな。

「考え事してて眠ったのにやけにスッキリ。しかしながら眠い」

軽く伸びをしてベッドから降りる。スピネルも軽く伸びをして同じくベッドからしなやかに降りる。

「…ちよつと時間あるし、朝から外の見回りでもしようかな」

「殊勝な心掛けだ。だが短時間で昨夜の爪痕の主が捕まるとは思えん」

「解ってるさ、んな事。…たださ、ちょっと落ち着かない」

とりあえず突っ立っているのも何だから制服に着替えておく。片手間にPCを立ち上げる。

「して、どうする」

「ニユース辺りをググってみて」

「うむ」

スピネルが起用にネットを開いて、ワードを打ち込み、マウスを操作して絞っていく。…その姿はシニール。

「むむむ…ん？ 何だミツキ」

「なにがむむむ…、いや、何でもないですわよ？」

「そんなに儂が機械を操る様はしゅーるか？」

「滅相ありません。てか見慣れたわ」

着替え完了。あとは詰め襟を着るだけだが、家を出るまでは着ない。

「なんか出た？」

「ふむ。…速報板にあったな。“二次元からの侵略？謎の爪痕”」

椅子に座り、スピネルを抱き抱え、スピネルが開いたページを読む。…ふむ、あの時の写真も載っているな。改めて見ると、確かにあむが言ったように、巨大な獣か何かが引っ掻いたような痕に見えるな。

「…駄目だな。後は憶測ばかりだ」

「そりゃそーだ」

ゆっくりと細かく読んでみても書かれているのは憶測と嘘ばかり。
仕方ないっちゃあ仕方ないんだけどさ。

「有力情報無し、か」

「いや、一つある」

「え？ どれよ？」

抱えていた腕をスルリと抜け、前足で起用にマウスを操作、その項目を開くとそこには……

「み、“御崎海香”先生の新刊が出た、だとッ！？」

待望の新刊情報が載っていた。

――
――
――

ひとしきり部屋でヒヤッホイしたら時間が来てたので何事も無かったかのように上着を持ち、パソコンをシャットダウンさせて一階へ。

「学校終わったらソッコー買いに行くべ」

「見回りはどうするのだ」

「全速力で本屋へ直行、全速力で帰宅、全速力で支度。…パーフェクトだ」

「さよけ」

そんなこんな会話をしつつリビングに到着。…シアは、まだ起きて来てないのか？

「あら珍しい。おはよう二人とも」

「おはよう母さん」

「おはよう母君。今日は頭上に注意されたし」

「ふふっ、そうね。シアより早く来るなんて本当に珍しいものね」
「母さんまでなにな」

他愛もないやりとり。

朝はやはりこうじゃなきゃ。一番起きて来るのが遅いのはご愛嬌。

「…昨日何かあったの？」

「まあ、ね」

「母君。ミツキは家族の身を案じておるのじゃよ」

「あら。それで早起き？」

事情を知っている母に大まかに…と言っても伝える事は少ないが。

「近所で爪痕…」

「魔女だろうと魔法少女だろうと、危険な事にならないからさ。
なるべくシアを早くに帰すよ」

「…ミツキ」

「母君、聞かず言わずとも儂が付いておる」

不安そうな表情を浮かべる母に、安心しておけとスピネルが言う。
怪我やら何やらは毎度の事だから。

「…ちゃんと帰ってくるのよ?」

「もちろん」

「必ず儂らは帰ってくる」

一番初めに、母とスピネルが交わした約束。絶対に帰ってくる事。それが、俺が魔女狩りをする条件だ。…と、何か朝から湿っぽくなつたな。

「おはよ〜。……あれ?」

「お、シア。おはよう」

「おはよう、シア」

「にゃ〜」

そこに空気を変えてくれる救世主登場。目を擦りながらだがな。しかも先に起きてる俺を見て……

「…もいつかい顔洗ってきます。お兄ちゃんが先起きてるなんて寝ぼけてるんだきつと」

「そいつあちよいと心外だぞ妹」

「普段を鑑みれば当然じゃて」

「出かける時傘で大丈夫かしら」

「…このままでは俺の寿命がストレスでマッハなんですけどね」

マジでふて寝するぞ?

「ああ、そうだ。ミツキ、シア」

「ん？」

「あい？」

そこら辺でふて寝の体勢に入りそうになった俺をやりわりと母に止められ、再度の洗顔から戻ったシアに

「尖穿！」

「ぐべえっ！？」

「寝ている相手を強制的に起こす技の一つ！」

背中に瞬速の正拳を食らわされ、ひとしきりのたうち回った後、粛々と朝飯を食う事に。

まだ痛む背中を気にしつつ母が俺達に思い出したように言った。

「前のゆまちゃんの件、すぐにでも決着しそうよ。勿論、勝ちでね」

「「おお……！流石我等兄妹の母様やでえ……！」」

「こういう事柄に関しては流石強いな母君」

何でも出来る母は司法も出来る。

聞いた話で、相手が政治家だろうが容赦しないんだとか。

母が勤め先の方々に付けられたあだ名は

マザーオブウィル

ザ・ビッグママ

ネゴシエーター（物理）

微笑みのサザンクロス

厨二臭えとは良く言われたものであり、まだ知らない通り名も数多

くあるとか。とりあえずコジマはまずい。

「今年中には完全決着させるわ。」

聴取して解った事だけど、ゆまちゃんをあのままにしておいたら、確実に……」

「……そう」

「じゃあ、新しい家具揃えないと!」

「……ふふっ、そうね」

……未来にや我が家はどうなってる事やら。俺が成人する頃には大家族とかちよつと洒落にならないっすねえ……。

——時間をぶっ飛ばして学校、更に昼休み。

今回はまだか、さやか、ほむら、仁美、俺に、シアと、友人の里等と……計七名で卓を囲んでの昼食となった。

マミさん? 誘おうとしたら既に姿は教室には見えず。

「巴さんならさっき、急用が出来たとかで五限が終わるまで戻れないって、何だか、タイミング悪すぎとかばやいてたわ」

「え、ああ、そうですね。ありがとうございます」

ホントタイミング悪いな……。

次からはその日じゃなくて今日の夜誘うでしょう。

「さやかあ、てめえは俺を怒らせた……ッ!」

「なあに……? 負け犬の遠吠えはこの美樹さやかの耳には聞こえ

んなあゝ！」

「まどか、この前もそうだったけど、あの二人はいつもああなのかしら？」

「うん、まあ…。あはは…」

現状を簡潔に言えば

おかずをさやかが盗った！

俺の怒りが有頂天に達した！

→イマココ

「お二人とも、周りの皆さんに迷惑ですわよ？」

「止めるな仁美！もはやこの乱世を止めるのは言葉ではなく、乱世のげんこつ！」

お互い、俺もさやかも大概ヒートアップするところなる。

「ひつきぼしの鳳凰の握りこぶしの奥深い意義の天翔の十字の鳳一ツ！」

「ミツキのナム豆鳳凰げんこつに姿勢が…！」

「敵は全部身分の卑しい人です！」

左手に弁当、右手に箸を持ちながら左右に腕を伸ばし、片足を軽く上げて荒らぶる鳳凰のポーズ！

「ならば私もその例に応じよう…！」

俺がボケたのならさやかもボケて返す。これが宿命か…！
さだめ

「この北斗星の神のこぶしの神秘の義…！天の足の不自由な人は気にします！」

シアは勿論乗ってくる。

日常茶飯事なら殊更に。

隣の里等は乗り切れず、引き気味。

「…シアさあ、普段クラスじゃおしとやか〜みたいな感じなのにここに来ると生き生きしてるね」

「だってお兄ちゃん達がいるし」

「…あつそ」

シアもまどかも仁美も一応は注意するんだが、俺もさやかも止まらないので乗った方が恥も軽くなると学んだのだろう。今回で里等も思い知った事でしょう。ほむらはほむらで頭にハテナマークを浮かべて珍しいものを見る目でこちらを見ている。

周りのクラスメイトも

「またか…」と言う空気を醸し出している。たまに乗ってきたりする。

んで…、昼休みに騒いだ以外に特に何もなかったからすつ飛ばして放課後。

「ああ…あたし寄る所あるんだ」

「言わずとも上条んとこだろ？」

「う、うつさい！」

帰り支度をまとめ、寄り道するか？という相談中にさやかが言いだした。

「わたくしも、習い事があります」

「仁美も駄目か」

「私もさやかちゃんの付き添いで…」

「あいよ。まあ俺も用事があつたし」

「じゃ何故聞いたし」

そこは気にするな。

ほむらは…用事がある、と言ってもらって先に帰宅した。後で合流して、昨夜の件で話し合う手筈だ。

「じゃあ、またね」

「おう。上条によろしくな」

「わたくしもこれで。ミツキ君、機会があれば顔を見せに来いと先生が言っていましたわ」

「じゃあしばらくは無いな」

「ふふふっ、そうでしょうね」

まどか、さやか、仁美と別れ、後はシアを待つ…とメール、シアからか。

「…友達と寄り道か。…なら、先に帰還しているって」

シアを待つ必要が無くなったためとつと帰宅するでしょう。

…そついや、ほむらは昨夜の事件は知ってるんだろ？ あいつポーカーフェイスだから表情読み取れないし。

・ ・ ・

「ただいま」

「おかえりなさい。シアは…、お友達と一緒にね？」

「イグザクトリィ。その通りでございます」

我が家に戻り、母に帰宅を告げる。

して母はリビングで何やら書類と格闘中のようなのだ。

涼しい顔してるって事は（母にとっては）軽い内容なのだろう。気にせず部屋に戻る、その前に…

「…と、母さん。スピネル帰ってる？」

「スピネル？ 帰ってるわよ。部屋に戻ってるはずだけど」

「ん。アリガト」

よしよし。感謝に軽く手を上げ、二階の自室に戻る。

「ただいま」

「おかえり」

「おお、いたか。すぐ出るぞスピネル」

「うむ」

さすがスピネル。帰る前に念話で話しとけばよかったか思ったが言わずとも察知するスピネルさんマジ感謝。

すぐさま着替えて、スピネルを抱え部屋を出る。

「…っと。ちょっと出掛けてくる」

「ええ。気をつけてね。無茶しちや駄目よ?」

「あいあい」

スピネルを抱えて出るって事は大概あれ関連なため、母も感づく。
今回は話し合いだけだから怪我はしないとは思っけど、大方突発だからなあ。

「ほむら、もう着いてるのかな」

「待ち合わせは?」

「男が必ず先に着いているもの。だろ?」

「解つとるならダッシュだ。念話であやつに聞き出すという不粋な事はするなよ?」

「分かってますって」

ほむらと落ち合う場所は、前回ほむら達が魔女を討伐したあの廃ビル。

何故そんなところ?って思うだろう?

学校の教室を出る前にほむらが、話があるならあの場所が調度良いからそこで。と指定があつたからだ。

まあ、ほむらと俺の足ならすぐに着くし問題は無い。前は急いでたし、ほむらを抱えての移動だったから手間取りはしたけどな。

…さて。適当な場所を見付け、人目に付かないようエフィケイアを展開。すぐさま戦闘装束に早変わり。

「…見られてないよな?」

「気にする前にとつと移動するぞ」

「あい了解…つと」

懐からお馴染みの仮面を取り出し装・着。正義の仮面審問官ひっそ

り登場！

「だから格好付けとらんと、さっさと行け」

「…はい」

シヨボンとしながら身を翻して、そこらの街灯に跳び移り、更にそれを足場にして、また別の所へと跳ぶ。

「…ミツキ」

「ん？」

「会議…と言うには余りにも小さいが、それにはお前だけで行け」

「え？ そりゃまた唐突だな」

珍しい。スピネルが別行動をとりたいたなんて言うなんて。

大概、儂が行くのだからお前も付いて来るのは当たり前だろう！とか言うのに。

「…うん。了解。気をつけてな」

胸元のブローチが、すぐさま元のスピネルに戻る。

「うむ、お前もな」

それだけ言うと、俺とは逆方向に跳び去っていった。…何だろっ突然淋しさと心細さがちよつと襲ってきた。

「…いやいや、淋しがってどうするよ」

大概いつも一緒にいて、スピネルが嫌がる所じゃない限り常に近くにいた。

こんな事は滅多どころかまず無い。

『…はあ』

…久々に溜息が出た。

——Side スピネル——

見滝原総合病院前…。

ミツキと別れ、妙な気配、波長が漂っている場所にたどり着いた。
勿論、儂の姿は他の者からは視認出来んよう術を施しておる。

「昔からこのような施設には負の念が集まりやすいが…、さて…」

行き交う人波を避けつつ、扉が開いたのを見計らいスルリと内部へ侵入する。

…ミツキならこの場合何と言ったかな。たしか、すにーきんぐ？とか言っておったか。

今更ながら、ミツキを一人で行かせた事に不安が生じてきおった。
まったく…。親でも無いと…。いや、長く一緒にいすぎたせいか…。
…。

(…ふん。いざとなれば念話があるだろに、何を不安になる必要があるだ儂は。これもミツキが独り立ちできるようにするために仕方なく…いやいや仕方なくというのではなく…)

……儂は一体誰に言い訳を言つとるだか。
とにかく、今は波長の探索が先だ。ミツキの事は後だ後。

「…どうしてこうなった」

「あはは…。でも、偶然ですね。マミさんとあむちゃんにここで会えるなんて」

「はい！まったくの偶然です！」

「そうね、偶然ね。特訓が早く終わった帰り道に二人を見掛けたからどこに行くのかな？なんて思ってた朝月さんと一緒について行こうとか、別に美樹さんの想い人がどんな人か見てみたいとか不純な動機じゃなくて純粋な偶然よ？」

「マミさん思いつ切り本心バラしてんじゃないですかー！」

すると、入口から見知った顔の娘達が入ってきた。

美樹さやか、鹿目まどか、朝月あむ、バマミだ。

「ちょ、ちよつと顔見てくるだけですよ」

「顔見てくるだけなのね。ええ。皆で大人しくしてるわ。大人しくね」

どう聞いても覗きに行くと行っておるな。バマミのやつ顔がにやけとるではないか。

美樹さやか、チラチラとバマミ達の方に振り返る。相変わらずバマ

ミはにやけながら美樹さやかに手を振るのみ。

「……さあ！後を追いましょう！」

「おー！」

「や、やっぱり行くんですね…」

やはりと言うか何と言うのか。

嬉々としるのはやはり年頃の娘だからか、はたまた“桜華”の影響ないしミツキの影響か…。

どちらにしろ誉められた行為ではないな。

「一度やってみたかったのよねえこういうの。さあ鹿目さん、案内頼めるかしら！」

「えええ…」

「私知ってますよ！こうゆーのって、ガメラって言うんですよね！」

ガメ…ああ、出歯亀の事か？

一緒にたにされた某が哀れだ。

意気揚々と鹿目まどかと朝月あむを引き連れ、いや、鹿目まどかをぐいぐい押して突き進むその顔。とてつもないくらい生き生きしてるな。

……儂も行ってみるか。

美樹さやかあたふた顔が見れるか楽しみ…いやいや儂は波の正体を探しに来たのだ。

これはついで見える必要があるからの。病院というのは負の念が…、しまった。おいて行かれてしまう。

ばれぬよう足音と気配を消し、あやつらが乗ったえれべーたーに滑り込む。

「ワクワクするわ…。これがあのスニーキングミッションって言う

のね!」

「マミさんったら…」

単なる野次馬と代わらなくなった巴マミ。…まあ、ミツキが何とかするだろう。

「ところで巴先輩、スニーキング? って、誰に聞いたんですか?」

「ん? それがね、私の友人のミツキ君って子がよく言うのよ。こういう人が少ない場所はスニーキングしやすいだろうなーって」

「へえ。ミツキって人からなんですね」

「…え? ミツキくん、ですか?」

…む。よもやここでミツキの話題になるとは。

幸いこやつらはミツキのやっている事は知らんはず。

名前だけで正体にたどり着く、などと離れ業をやったのけるなら無理矢理にでも……。

「あら? 鹿目さん知ってるの?」

「知ってるも何も、同じクラスで幼なじみなんです」

「えー!? そんなの、初めて聞いたわ」

「ミツキくん、何も言ってなかったんですか?」

「…ええ、まあ」

一瞬、巴マミの表情が曇ったな。

それはそうだ。計らずも、またミツキの友人を巻き込んだのだからな。

「……………」

「…マミさん?」

「…あ、何でもないわ。でも本当にビックリよ。ミツキ君も人が悪

いんだから」

「そうですよ。あ、もしかして、ミツキくんがたまに三年生のところに行ってるのって……」

「それは……あら、着いたみたいよ。この話はまた今度。皆交えて話しましょう」

そうこう話しているうちに目的階まで着いたようだ。扉が開き、三人が下りたと同時に儼も下りる。

「それ、私も混ざっていいですか？」

「もちろんよ。ミツキ君の色んな事、聞かせてあげるからね」

…ミツキ、お前の与り知る所で秘密（主に私生活面）が暴露されそうになつとるぞ。しかしそれはそれで面白そうだから黙っておくとするか。

そして三人とも声を潜め、足音を消し、上條恭介のおる病室の前にとどり着いた。

「ここが……」

「あのう、やつぱり止めませんか？」

「鹿目先輩、ここまで着たら共犯ですから観念してください」

「あうう……」

波長は此処らには感じられぬ、か。逆に遠ざかったように感じるが、まあこやつらの近くに來ない限りは手を出さずともよからう。

「さて。扉を開けたらさすがにバレちゃうから、ここは聞き耳を立てましょう」

「どんなあまアトクしてるかあむは興味津々です！」

「……さやかちゃん、ごめんね」

そう言い、音を立てぬよう静かに病室の扉に耳をつける巴マミと朝月あむ。そして根負けした鹿目まどか。端から見たらなんとも滑稽な不審者か。
と、言いつつ儂も…。

「さやかはレアなCDを見つける天才だね」
「いやあ、あはは…」

ふむ。期待したほどいちゃいちゃはしとらんか。とは言えあの美樹さやかがいちゃこらしたいなどと言える度胸は持ち合わせておらんなあ。

「今日、ミツキは来てるのかい？」

「ミツキ？ アイツ今日は用事があるって言ってたよ。恭介によるしくって」

「うーん、そうか。前のリベンジしたかったんだけどなあ」

またミツキの話題か。あやつは話題にされるのに事欠かさないな。気になるのは、やや上條恭介の声に気合のようなものが混じったようだが、ミツキはいないと言われたら消えた。…ミツキ、何をしたのだ。

「リベンジって…、あんま無茶しちゃ駄目だよ」
「でも見てくれよ。ほら」

む！？何だ！何を見せたのだ上條恭介！

「……」

「ま、マミさん!？」

「巴先輩大たん」

やはり中が気になったのか、音をさせないよう微妙を扉を開ける巴マミ。こら、儼にも見せる!

「前よりかなり動くようになっただろう? さやかとミツキのおかげだよ」

「そ、そっかな? あたしは何もしてないような……」

「うっん。さやかはいつもこうやって来てくれるし、話を沢山聞かせてくれて、CDまで持ってきてくれる。本当に感謝しきれないよ」

「……い、いやあ、その……」

くっ……!この身体が恨めしい!見えぬではないか!おのれ!……あ!見えた!見える、見えるぞ!儼にも中が見える!

「……意外と良いふいんきですね」「予想してたより美樹さんデレデレねえ」

ほほう、上條恭介が見せていたのは腕だったのか。……そういえば、ミツキが恭介は事故で腕が……とか何とか言っておったな。興味が無いから聞き流しておったが。

あの上條恭介の顔を見る限りではどうにかしていないようだが、果たしてどうなのか。

「……上條君、昔事故にあって腕と足が……」

「そうだったの……」

「何だかちよっと気まずいですね……」

一旦覗くのを止め、巴マミ達の話聞く。余り興味は無いが、聞くだけ聞いておくか。

「さやかちゃんをよくお見舞いに行くらしいんですけど、ミツキ君は二、三回お見舞い来たら来なくなつたみたいで…」

「…多分ミツキ君にも考えがあつて来ないんでしょうね」

「ミツキさんの考え、ですか？」

「あの子が簡単な理由でお見舞いしに来なくなる訳が無いのよ。鹿目さんなら知ってるでしょうけど、あのミツキ君よ？」

ふむ。やはりミツキは何かしら噛んでるのか。ふふ、母君と儂の教育の賜物よなあ。……………やや誇らしく思っていたら背後の扉が開く音が。

「…あ」

「…はっ」

「……………」

「「「…し、失礼しました」」」

「……………お、おどれらああああつつツツ！……！」

・
・
・
・
・

「「すみませんでした……」」
「……まったく」
「はははっ……」

結局美樹さやかに見付かり、しこたま叱られ、挙げ句看護婦に「静かに！」と怒られる始末。
やれやれ全くだな。

……儂は見えとらんからいいのだ。

「恭介、紹介するね。前に話したバマミ先輩と、朝月あむちゃん
「はじめまして。三年のバマミです」
「朝月あむです！」
「上條恭介です。よろしく」

それぞれお互いに自己紹介。
修羅場にならんでよかったな。

「ごめんねさやかちゃん、上條君……」
「いや大丈夫だよ」
「どうせバマミさんが無理矢理引っ張ってきたんでしょ？」
「引っ張ったんじゃないかって押したのよ」
「巴先輩素晴らしいッ！」
「威張って言わないでください！あとあむちゃんも煽るな！」

えへんと特盛の胸を張るが完全に屁理屈状態である。そして皆で他愛もない談笑を始めた。
暇だから部屋を軽く見渡す。……しかし病室とは思えんくらいに豪華な部屋だな。壁一面CDと本の山だな。
動けん状態というのは、兎角不便なのだな。よく心が歪まなかった

もの。

「はい！朝月あむは上條先輩に質問がありますです！」

すると、朝月あむが元気良く手を上げ、上條恭介に質問を迫った。
何だ？碌でもない事か？

「ん？ どんな質問だい？」

「結構切り込みますが、よござんすですか？」

「ははっ。まあ答えられる範囲ならね」

あやつ何故芝居がかった事をするのか。

「ではでは……」

一拍置き、おかしい緊張感のような、妙な真剣さをかもしだす朝月あむ。

無駄に真剣さを出すな。

「過去に、噂のミツキさんと何かあったんですか！？」

「うん。あったよ」

「あっさり！」

「大方そうかなって、ね」

躊躇う事なく答えた上條恭介。
既に予測済みだったか。しかしそれは儂も気になるところ。聞かせてもらおうか。

「お二人は、僕が事故に遭った事は…」

「事故に遭った、という事しか聞いてないわね」

「そうですか。なら話します」

「…いいの？恭介」

「ああ、大丈夫。さやかにも聞いてもらいたかったし、僕の決意表明ってことで」

「…何やら強い意志、意思が伝わるな。」

「その事故のせいで、僕は左腕と両足が動かなくなっただんです」

「絶望しました。二度と大好きな音楽に携われなくなる。死にたいなんて思いました」

「でも、そんな心が折れた時にミツキが見舞いに来てくれたんです」

「それでミツキにそんな事を漏らしたら、激怒されてしまった…」

「“ふざけるな。お前まだ生きてるだろ！”

「って。あんな剣幕のミツキを見たの、最初で最後かも知れない」

「それで僕も怒ってしまっただね。お互い胸倉を掴みこんで喧嘩になっただね。…ああ、大立ち回りみたいな事はありませんでしたからね」

「…そして僕はミツキに」

「お前に僕の気持ちなんてわかるか！所詮他人事のくせに！
って言ってしまったんです。今思えば、なんて事言っただって後

悔してます」

「そしたらミツキが

“解りたくもない！助かった命を粗末にするような馬鹿野郎の気持ちなんか知りたくもない！”

って言つて、僕を殴ったんです」

「弱音も悩みも、俺なんかで良いなら死ぬまで聞いて受け止める！
ただど死にたいなんて言う戯事は死ぬほど聞きたくない！」

「忘れるな！

お前の事を想つて泣いてくれる人がいる事を絶対に忘れるんじゃない！

それを忘れて死んだらお前、絶対後悔するぞ！」

「……堪えました。殴られた事もそうですけど」

「それから二、三度見舞いに来て、絶対退院してやるって約束をしたら、ぱったり来なくなりました」

「……最後にミツキが

“あの時殴られたのが悔しかったらならさっさと退院してリベンジしに来い”

って」

「…ミツキ君って、意外と熱血漢だったのね」
「かつくいいですね！リベンジに来い！ですよ！」

成程な。絶望の淵から上條恭介を無理矢理引つ張り上げたのか。
しかし荒治療が過ぎるぞミツキ。下手したら自害しかねんというに。
だが見事、上條恭介をここまで立ち直らせた。

流石母君の息子、儂の戦友よな。伊達に死の間際に立ってはいない
と言っべきか。

「あいつ…」

「熱い、熱いですねー！男と男の友情って言うんですよね！」

「すごいなあ…。やっぱりミツキくんは」

「うん。彼は本当に凄いよ。小さい時から驚かされてばかりだけど」

「あら、そうなの？ 私、途中から会ったから、小さい頃の話を知
らないのよねえ」

…ミツキ、お前の守っている日常は今確かにこうやって存在してい
る。

助けられなかった命は多かれど、救った命もある。
いつまでも、こうあってほしいものだな。

「はあゝ満足したわ」 美樹さんやミツキ君の恥ずかしい話も沢山

聞けたし、もう大満足よ」

「あたしとミツキ的にはとても忘れてもらいたい事でした…」

「あははっ。さやかちゃん、上條くん元気で良かったよね」

「私も話聞いてミツキさんに会いたくなっちゃいました！」

現在病院を出て駐輪場。結局、面会時間が終わるまでガラガラと居座ってしまった…。まあ波が遠ざかっていった事だけでも良しとする。

良しと言ったらしいんだ。被害は出とらんだろう。

「…あの調子なら恭介、すぐにでも退院出来そうだなあ」

「こういうの何なんですけど、事故に遭った人とは思えないくらい前向きでしたね上條先輩」

「そうなんだよねえ。まあ元気なつて、好きな音楽が出来るようになったら万々歳だ」

確かに。ミツキの喝と美樹さやかの献身が効いたのだろう。

人は支えを失えば簡単に崩れる。それを上條恭介は、良い形で支えられとるのだ。これでまた死ぬなど吐かしおったら罰が当たるな。

何と言ったか…リア充爆ぜろ？

「——きゃー！」

「うひゃあ!？」

む？ 何だ!？

突如鹿目まどかと朝月あむの悲鳴。尻餅までついておる。

それと同時にこの波長、……魔女?!まさか、グリーンフシードは何処だ! 何故気付か何だ!

「ちょ、大丈夫!? まどか、あむちゃん!」

「あたた…私は大丈夫です」

「私も大丈夫だよ…」

「一体何が…。それに、ソウルジェムが反応してる…?」

何処だ!この気配だと孵化間近だぞ…!

ちいつ!しかもまた波長が乱れとる!邪魔するのは何処のどいつだ!?

「…あ! マミさん、あれ!」

「…っ!」

美樹さやかがある方を指差す。

そこには、確かにグリーンフシードがあった。

やはり孵化寸前、しかも病院の壁に刺さっておる。

「まずいわ…、魔女が出て来そうになってる…」

「ええっ!？」

「そんな!？」

「美樹さん、鹿目さんと一緒に下がって!朝月さんは二人の近くに!」

「りよ、了解です!」

「まどか、立てる?」

「う、うん。ありがとうさやかちゃん…」

油断していたとは言え、一体全体何故急にグリーンフシードが…。儂の網と巴ミの感覚を素通り、尚且つ孵化寸前がある。

孵化寸前ならば、魔女特有の…孵化の波で感知出来る。それが出来なかったと？

…危険ではなかった状態から即孵化寸前にまでさせる？ …出来るのか？ いや、実証するにしても要素が見当たらん自体ではどうする事も出来ん。

「巴先輩、グリーンフシードって飛んでくるもんなんですか…？」

「そんなの初耳よ。突然現れて、突然結界ができて、突然巻き込まれるって事しかなかったわね」

「あのグリーンフシード、絶対性格悪いわね！」

「さ、さやかちゃん…」

美樹さやかの冗談はさておき、結界に取り込まれる前にミツキに連絡を——ぐあっ！？

な、何だ今のは！？

頭に直接ノイズを叩き込まれたような感覚は…！？ も、もう一度

——あぐっ！？ ま、またノイズが…！

……何て事だ、念和妨害だと…！？

(……ミツキ)

「…っ！来るわよ！皆備えて！」

「…ほむらも知らないか」

「ええ。正直、今回は初めての事が多すぎる。対処は早めにする必要があるわ。…後手に回ってしまうけど」

「そうだよなあ。先手は打ちたいが、正体すら判別出来てないやつに先手は打てないわな」

俺とほむらだけの報告会兼作戦会議。例の件の話に加え、どうするかを話あったが…。見ての通り、前に進めない状況。

まず、魔女か魔法少女か判断が付かない。

次にまだ昨日の事件であって、被害が建物のみ。人に被害が出てない。

更にほむらは見当も付かない。知らない事らしく、ほむら自身もどうするかを悩む必要があった。

「ああもうお手上げ侍！」

「音も手も上げるにはまだ早いわ」

「そうは言ってもなあ…」

昨日深夜。スピネルは密かに事件現場に赴き、痕跡を辿ろうとしたらしい。しかし、前にあった妨害電波のようなものに阻まれて探索出来なかったらしい。

そのうえその電波の有効範囲がやたら広く、我が家ギリギリまで届くくらいだとか。

「スピネルは魔力の残り香…魔法を使うと尾を引くように残るようなもんなんだけど、それでも不可能だったんだと。あの場所を中心に、渦を描くように広く薄く拡散してたから追うものも追えなかったんだと」

因みにほむらにも残り香探索は無理。硝煙の臭いならするんだが、使った位地にだけ魔力の香りが残るだけで追跡までは出来ない。

「…仕方ないわ」

「そう言ってもらえて助かるよ」

役立たず！言われるよかマシだしな。

「まどか達に関しては、しばらく帰りはまとまって下校するようにするか？」

「…たしかに。狙われたら対処が難しい」

「じゃあ一つ決まり。…やっとなつか」

全くだと言わんばかりにスタイリッシュに髪を撫でるほむら。一々かっこいい。

「はあ…。スピネルやマミさんもいればもう少し具体的に決められたかなあ」

如何せん二人だけ。しかも俺達は言えない秘密持ち。…どうしろと。

「ほむら、次はマミさんも誘って……どうした？」

「……………」

なにやらほむらの様子がおかしい。明後日の方向を向いて表情を強張らせていた。

「…どした？」

「…魔女」

「え？」

「魔女よ」

ほむらが左手甲を軽く上げて見せてきた。

ダイヤ型の…ソウルジェムか。淡く光っているが、点滅する間隔が短い。

「…まさか」

「近いのか」

「いえ、遠いわ」

「…ここまで届くとかどんだけだよ」

すぐさまエフィケアのセーフティを解除して、いつでも出れる準備をする。

「ほむら、今の俺は足手まといだ。先に行け」

スピネルがない今、俺は予めロジックに記録させてある術しか使えない状態にある。

今あると言えば、身体強化に足場形成、気配を薄くする。これぐらいしかない。

「それは出来ない。一緒に行くわよ」

「…お人よしなこって」

ほむらから差し出された手。

…なんか、最初より随分優しくなったような。
とにかく、ほむらの手を取る。

「エスコートよろしくな」

「女の子にエスコートされるピエロなんて珍しいわね」
「うっさいわ」

まあ、確かに格好付かないよなあ。

一応予備ロジックに補助術式を記録してあるんだが、全部スピネルが持つてるので意味がない。
諦めてほむらのエスコートを受けよう。

「出る」

「おう」

その瞬間、周囲の景色が色を失った。時間停止が始まった。

「俺が足場を作る。無駄に着地せずに行けるだろ」
「助かるわ」

タイミングを合わせて一気に跳躍。前回割れた窓から飛び出し、足場を形成させて跳ねまくる。
そっぴや、何も聞かずに飛び出したが……

「場所——『解るのか?』」

懐から仮面を取り出して装着。
着いた途端素顔見られちゃたまないしな。

「……見滝原病院」

『はぁ！？』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9796s/>

魔法少女まどか マギカ | ← Intruder Alarm

2011年10月30日12時15分発行